

全日本私立幼稚園連合会  
第35回東北地区私立幼稚園教員研修大会  
秋田大会



# 大会集録

期 日 令和3年10月15日(金)・16日(土)

主 催 全日本私立幼稚園連合会東北地区会  
共 催 一般財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構  
実 施 秋田県私立幼稚園・認定こども園連合会、秋田市私立幼稚園・認定こども園協会  
後 援 秋田県、秋田県教育委員会、秋田市、秋田市教育委員会、秋田県私立幼稚園 PTA 連合会  
秋田市私立幼稚園 PTA 連合会

表紙絵について

■制作者／秋田を代表する木版画家

池田修三（いけだしゅうぞう／ 1922 - 2004）

■作品名／ゆこうよ（1984 作）

象潟郷土資料館所蔵

令和3年度 全日本私立幼稚園連合会  
第35回東北地区私立幼稚園教員研修大会秋田大会

## 大会集録 目次

### ◇大会集録目次

1	ご挨拶		
	第35回東北地区私立幼稚園教員研修大会秋田大会会長	武田 正廣	・・・ 2
	第35回東北地区私立幼稚園教員研修大会秋田大会実行委員長	渡辺 丈夫	・・・ 3
2	大会主題・開催要項	・・・	4
3	研究大会次第	・・・	5
4	リモート研究発表（分科会）一覧	・・・	6
5	記念講演	・・・	7
6	研究発表・分科会記録		
	第1分科会	・・・	17
	第2分科会	・・・	21
	第3分科会	・・・	26
	第4分科会	・・・	31
	第5分科会	・・・	34
	第6分科会	・・・	40
	第7分科会	・・・	45
	第8分科会	・・・	50
7	大会役員	・・・	51
8	編集後記	・・・	52



## ごあいさつ

第35回東北地区私立幼稚園教員研修大会

会長 武田 正 廣

第35回東北地区私立幼稚園教員研修大会を秋田県の担当として開催させていただきました。新型コロナウイルス禍の下、開催の一年延期、リモートによる開催と大変難儀をいたしました。皆様の温かいご支援ご協力をいただき、東北各地より500人余の参加をいただき、盛会裏に終えることができました。関係する多くの方々のご支援ご協力に深く感謝申し上げますとともに、心よりお礼申し上げます。

開催前は、東京オリンピック・パラリンピックの後ということで、いわゆる「オリンピックロス」を心配しておりましたが、それよりも大きな出来事「新型コロナウイルス」の蔓延により、計画を進める上で非常に困難な大会でした。当初は公開保育を中心にとということで、公開園を決めて準備に入りましたが、緊急事態宣言が出されたり、他県との往来自粛要請が出たりと、公開保育は断念せざるを得ない状況となりました。急遽、公開保育から研究発表へと開催方法の変更を余儀なくされましたが、発表園の先生方には大変なご苦勞をおかけしたものと心痛めております。それを乗り越えて、各分科会の研究発表園共にすばらしい研究発表をしてください、参加してくれた先生方も大変喜んでくださっていると聞いております。発表園の先生方にはこの場をお借りして、改めて感謝申し上げます。また、汐見先生の講演や各分科会での指導助言の先生方からも、それぞれご専門の立場から有意義なお話をたくさんいただきました。大会はリモートになりましたが、今できる環境下で、多くの成果が得られたものと確信しております。リモート開催をはじめ、本大会が今後の大会のあり方や幼児教育発展の一助になれば大変うれしく思います。

ここに、大会集録をまとめることができました。本大会の研修成果が、これからの幼児教育の質の向上に少しでもお役に立てれば幸いに存じます。

終わりに、本大会の開催に当たっては秋田県内の多くの方々のご支援ご協力をいただきました。誌面をお借りしてお礼申し上げますと共に、東北地区の幼稚園教育が更なる発展を期すようご祈念申し上げ、ご挨拶と致します。



## 大会を終えて

第35回東北地区私立幼稚園教員研修大会  
実行委員長 渡辺 丈夫

第35回東北地区私立幼稚園教員研修大会を無事終えることができました。ご協力、ご支援いただいた多くの関係の皆様にご心より御礼申し上げます。

この度の大会は、新型コロナウイルスに対峙した大会でした。コロナ禍に於いて、東北大会の最大の特徴である公開保育をどうしたら実現できるか模索し続けましたが、感染の拡大から公開は断念せざるを得ませんでした。一時は、開催の中止も含め対面とリモートの併用案いわゆるハイブリッド方式の検討等紆余曲折ありましたが最終的には全面リモート開催といたしました。

初めてのことばかりでしたが、関係各位のご理解ご協力により無事開催することができました。リモートにもかかわらず、東北各地から551名の先生方にご参加いただきました。これは、キャリアアップ対象のうえ、移動なしに手軽に参加できるためと推測しています。今大会が、今後の研修形態を探るうえで参考になれば幸いと存じます。

また、公開園並びに研究班の諸先生方にとりましては、公開保育が急遽発表形式に変更になり諸準備本当にご苦勞様でした。指導助言の先生方におかれましては、遠隔にもかかわらず班別研究に対し懇切丁寧にご指導くださるとともに研修大会当日は分科会に於いて適切な指導助言を賜りました。厚く、御礼申し上げます。

最後に、この度の大会にご後援をいただきました秋田県、秋田市、秋田県秋田市の私立幼稚園PTA連合会に加え協賛いただきました企業各位、さらには、大会会場準備と運営に携わった全ての皆様に対して、謝意を表する次第です。

来年は、第36回大会として、山形市で開催されます。公開保育を中心とした東北大会となりますことを祈念いたしまして山形県にバトンを渡したいと思っております。

どうもありがとうございました。

## \*\*大会主題\*\*

新しい時代を伸びやかに生きる  
～社会に開かれた質の高い幼児教育を～

### 開催要項

- 1 主催 全日本私立幼稚園連合会東北地区会
- 2 共催 一般財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
- 3 実施 秋田県私立幼稚園・認定こども園連合会 秋田市私立幼稚園・認定こども園協会
- 4 後援 秋田県、秋田県教育委員会、秋田市、秋田市教育委員会  
秋田県私立幼稚園PTA連合会 秋田市私立幼稚園PTA連合会
- 5 期日 令和3年10月15日（金）・16日（土）
- 6 会場 10月15日（金） 運営委員会（リモート） 秋田ホテル  
研究発表7園（リモート） 秋田ホテル  
免許状更新講習（リモート） 秋田ホテル  
10月16日（土） 挨拶・記念講演（リモート） 秋田ホテル

### 7 日程

#### <キャリアアップ研修>

		9:00	9:30	10:00	12:00	13:00	15:00	16:30	
15日 (金)		Zoom 接続	運営委員会		Zoom 接続	分科会	指導助言	終	
免許状更新	Zoom 接続	講 座		昼食	講 座		試験	了	

10:1510:4511:00

12:3012:40

16日 (土)		Zm 接続	開 会	記念講演	閉 会
------------	--	----------	--------	------	--------

記念講演は俯瞰図のカテゴリー※ (B6)

# 研 修 大 会 次 第

Z o o mを使用したオンラインによるライブ配信

10月15日（金）

【研究発表】 13：00～16：30

- 第1分科会 発表園 将軍野幼稚園  
第2分科会 発表園 秋田幼稚園  
第3分科会 発表園 幼保連携型認定こども園ウェルビューいずみこども園  
第4分科会 発表園 幼稚園型認定こども園追分幼稚園附属追分ベビー園  
第5分科会 発表園 幼保連携型認定こども園外旭川わんわんこども園  
第6分科会 発表園 幼保連携型認定こども園聖霊女子短期大学附属幼稚園・保育園  
第7分科会 発表園 幼保連携型認定こども園あさひかわこども園

【免許状更新講習】 9：30～16：30

第8分科会

10月16日（土）

- 1 開 会 10：45
- 2 挨 拶 10：45～11：00  
全日本私立幼稚園連合会東北地区会長 山西 幸子  
秋田県私立幼稚園・認定こども園連合会会長 武田 正廣
- 3 記念講演 11：00～12：30  
演題「保育における新と芯、そして不易と流行を考える」  
講師  
一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事  
東京大学名誉教授・白梅学園大学名誉学長・日本保育学会理事（前会長）  
全国保育士養成協議会会長 汐見 稔 幸 氏
- 4 大会実行委員長挨拶 12：30～12：35  
秋田県私立幼稚園・認定こども園連合会副会長 渡辺 丈夫
- 5 次年度開催県挨拶 12：35～12：40  
公益社団法人山形県私立幼稚園・認定こども園協会会長  
千葉 亮子
- 6 閉 会 12：40

リモート研究発表（分科会）一覧

分科会	研究発表園	指導助言者	司会者	記録園
第1分科会	将軍野幼稚園	聖心女子大学 教授 河邊 貴子	小林 洋平 (飯島幼稚園)	聖園幼稚園
第2分科会	秋田幼稚園	宮城教育大学 教授 佐藤 哲也	熊谷さやか 相原真希子 (ひかり幼稚園)	ルーテル愛児幼稚園 こまどり幼稚園・保育園
第3分科会	幼保連携型 認定こども園 ウェルビューいずみこども園	宮城学院女子大学 教授 磯部 裕子	武田 陽子 (にいだこども園)	勝平幼稚園・ひよこ保育園
第4分科会	幼稚園型 認定こども園 追分幼稚園 附属追分ベビー園	福島大学 名誉教授 大宮 勇雄	佐々木 優 (四ツ小屋)	のびのびこども園
第5分科会	幼保連携型 認定こども園 外旭川わんわんこども園	秋田大学 教授 山名 裕子	丹 由紀子 (港北幼稚園)	御所野幼稚園
第6分科会	幼保連携型 認定こども園 聖霊女子短期大学 付属幼稚園・保育園	関東学院大学 准教授 三谷 大紀	村山 裕子 (山王幼稚園・保育園)	土崎カトリックこども園 和田幼稚園
第7分科会	幼保連携型 認定こども園 あさひかわこども園	柴田学園大学 短期大学部 学長 島内 智秋	八柳 千秋 (あさひかわこども園)	太陽幼稚園・ベビー園
第8分科会	免許状更新講習	(一財) 全日本私立 幼稚園幼児教育機構 専務理事 加藤 篤彦	中村 滋 (高清水幼稚園)	高清水幼稚園

## 記念講演

演題

「保育における新と芯、そして不易と流行を考える」

講師



一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事  
東京大学名誉教授・白梅学園大学名誉学長  
日本保育学会理事（前会長）・全国保育士養成協議会会長

汐見 稔幸（しおみとしゆき）氏

### 【プロフィール】

専門は教育学、教育人間学、保育学、育児学。自身も3人の子どもの育児を経験。保育者による本音の交流雑誌『エデュカーレ』編集長でもある。持続可能性をキーワードとする保育者のためのエコ

ビレッジ「ぐうたら村」を建設。NHK E-テレ「すくすく子育て」などに出演。

最近の主な著書：『「天才」は学校で育たない』2017年（ポプラ社）、『さあ、子どもたちの「未来」を話しませんか』2017年（小学館）、『汐見稔幸 こども・保育・人間』2018年（学研）、『0・1・2歳児からのていねいな保育 全3巻』2018年（フレーベル館）、『保育者のためのコミュニケーション・トレーニング BOOK』2019年（ぎょうせい）、『今、もっとも必要なこれからのこども・子育て支援』2021年（風鳴舎）ほか多数。

### 《講演要旨》

時代の変化の速さは尋常ではありません。私たちが今育てている子どもたちが社会人になるころには、今ある仕事の半分近くがロボットや人工知能がこなしてしまうとも言われています。そうした時代に生きる子たちは幼い頃どのような体験をすることが、将来、人間らしく生きる力をもつことにつながるのでしょうか。

そこには人間についての深い洞察が求められます。それをどんな時代にも変わらず大切にすべきことと、時代にあわせて変化させるべきことに区分けしながら考えてみたいと思います。不易と流行(芭蕉)です。



# 保育における新と芯 そして不易と流行 を考える



家保研 汐見稔幸  
@エデュカーレ  
& ぐうたら村



## こういうテーマを選んだのは？

- 現代が、**人類史上、最も文化、社会等の変化が早い**からです。
- 保育や教育は、**社会・文化の変化が少ない**ときには難しさはあまりありません。
  - ∵**子どもの将来の生活が予想しやすい**からです。子どもは大きくなっても親と同じような生活をするわけですから、親は自分が人間として大事と思ったものを子どもに育てればいいわけです。子どもも親世代が自分の先輩になるので、親をしっかり追えばいいので、親世代を尊敬しやすくなります。
- ところが、**社会・文化の変化が激しくなると……**

## 社会・文化の変化が激しいと・・・

- 保育・教育は、子どもの今をその子らしく充実させながらその子とその子らしく生きる世界を大事にして生きていく資質の基礎を育んでいくというミッションを持つ営みです。
- 30年後には、今ある仕事の半分はなくなり、AIシステムで人間が苦勞してやることが激減する社会になります。そんな社会を生きる今の幼児たちに、乳幼児期にどういう体験をしてもらうことが、彼らが将来その子らしく、世界を大事にして生きていく資質を育むことにつながるのか???? 正解があるわけではありません。私たちが考えるしかないのです。

## 不易と流行、あるいは新と芯というテーマを選んだのには

- もう一つ、国の新しい動きがあるからです。
- 萩生田前文科大臣が発表した「幼児教育スタートプラン」です。
- まず萩生田前文科大臣の記者会見の発言をみてみましょう  
「こども庁の議論がなされていることについては、子供の政策に光を当てるという観点では歓迎をしたいと思います。一方で、こども庁に関する議論の如何に関わらず、子供の発達や成長を一貫して支援する観点からの幼児教育の充実は、文科省としてしっかり取り組むべき課題と受け止めており、そのための充実策として、今回の『幼児教育スタートプラン』を発表させていただいたところです。」

具体的には、ことばの力、情報を活用する力、探究心といった生活・学習基盤を全ての5歳児に保障する「幼保小の架け橋プログラム」の開発・推進、また、保護者や地域の教育力を引き出すための子育て支援の充実、幼児教育推進体制の強化、また、保育人材の確保及び資質能力向上などの内容を柱としております。

「令和の時代、これから全く今までと違うのは、小学校1年生からパソコンやタブレットが配られる学校が始まっちゃったわけですから、それに合わせてですね、幼児教育段階でもそういった準備ができることはこれから必要だと思います」

「どういうところにいてもですね、5歳の1年間は、小学校に上がる前段階として、同じ学びをしていただくことがこれからの義務教育に必要じゃないかと思っています」

## これをどう読むか、ですね

「幼児教育スタートプラン」制定のねらい

- ① 小学校教育が大きく変わる。遅れていたICT化もなんとか追いかけてつある。ならば、その基礎、準備を幼児教育で考えてほしい。
- ② そもそもsociety5.0の時代を生きる子たちへの知的能力の伸展は歴史的課題であり、そのために幼児教育全体を充実させたい。
- ③ すべての5歳児のために、ことばの力、情報を活用する力、探究心を中心とした「架け橋プログラム」を開発したい。
- ④ 幼稚園・保育所、こども園とも5歳児には同じ学びをさせたい。

## さて、以上のように、現代の幼児教育は難しい課題を抱えています

- ①そもそも社会・文化の**変化が激しく、先行きが不透明**。しかも子どもたちが生きることになる社会にも**難題が山積**。その中を人間らしく、その子らしく生きて行くには**どういう体験が幼い頃必要か**、判断しなければならない。
- ②国が、そういう社会を生きる子のために、幼児教育への期待を新たに示し始めたが、取りようによっては、**義務教育を5歳から始めたい**、その準備として**5歳児のカリキュラムを小1とつなげて開発したい**、**5歳児が全国一律のカリで学ぶ方向に持って行きたい**、とも取れる方針をうちだした。これをどう評価し現場としてどう対応するか決めねばならない。

## そこで、不易と流行、新と芯なのです

- 非認知的スキル**が大事となぜいわれたのでしょうか？
- それは、これまで人類は、**生活の中で**、心身を存分に働かせ、考え、アイデアをだし、工夫し、協力して生きてきた。その過程で生きるのに必要な資質・能力を身につけた。が、今はそれができない。そのため困難が多い社会をこのままでは上手に生き抜けない。そこで、**以前は生活の中で身につけた力を人工的に育てていこう**。それを**非認知的スキルを育む**といっている。
- もりの幼稚園**で育つこと、そうでない子の比較をすると、どうした力の育ちに差があったでしょう？(ドイツ調査)

## この非認知的スキルは、**不易の力**です

- 人類がこれまで生き抜いてきたのは、**生活**の中で種々の力を身につけたからです。
- 時代によって多少の差があっても、**好奇心、集中力、アイデア力、工夫力、相談力、試行錯誤力**  
**失敗から学ぶ力、レジリエンス、感情コントロール力**などが生きるために必要ということは、一貫していました。
- 今、生活の変化で、それが育ちにくい。ならば、園で、これまで**生活の中で**  
**自然と育ってきた力を、人工的に育てて**いこう。

## 人工的に、といってもできるだけ自然に育つように

- 非認知的スキルは脳のなかでは  
**生命脳**と  
**感情・情動脳**と  
**理性脳**の3つに回路ができることで育ちます。
- 生命脳と感情脳は、**やらされているとか、やりたいと感じていないときには、**  
**あまり働きません**。逆効果になることも。
- そこで、子どもが自由に、**やってみたい、知ってみたい、と挑むような状況**  
をつかって**自由に挑ませる**ことが大事になってきたのです。

## それぞれの子が自分で挑んでみたいという気になるような状況をつくること

- それが**環境づくり**、といわれるものです
- 環境づくりには**2側面**あります
  - ①もの、ことなどの環境をつくることで、要するに**園にしかけをつくること**です
  - ②子どもたちの自由な振る舞い、挑みを、**面白い!**と共感して、**励ましてくれる保育者、教師の存在**がある、ということです。
- この二つの環境づくりがあれば子どもたちは自ら育っていきます。  
子どもたちは**自育的生命**(大田堯)なのです。

## 経験カリキュラムの大事さ

- カリキュラムには大きく二つの考え方があります。
  - ①学校が採用しているカリで、**系統性を重視し、学問や文化から内容を配列してそれを子どもたちに教授して学ばせます**。**系統カリキュラム**とよびましょう。
  - ②**カリキュラムの原意に基づく**もので、デューイたちが採用しようとしたものです。**経験カリキュラム**と呼ばれます。
- カリキュラムの原意は、馬車が走ることでできる径のことで、そこから**経歴**、**履歴**という意味になりました。人の歩んできた道のことです。**経験**ともいいます。経験は、その子のその子にしかできないいのちの物語です。  
そこから**カリキュラムをつくる**とは、**それぞれの子の経験を発展させるための配慮・工夫のことをさす**ようになったわけです。**経験カリキュラム**です。

## 6領域の時代と5領域の時代のカリキュラムの違い

- 6領域は、名称からわかるように健康=保健体育、社会=社会、自然=理科、言語=国語、音楽リズム=音楽、絵画製作=図工と、小学校の**教科を引きずっていました**。教科でなく領域にしましたが。その意味で、**系統カリと経験カリのミックス**のようなカリでした。このカリでは、**到達度**がある程度評価基準になります。

- 5領域は、それと区別した経験カリの原理での提案でした。一人一人の**学びの履歴=経験の意味をしっかりと把握すること**、それに基づいてカリキュラムを改善する(**マネジメントする**)こと、それを**子ども理解**といい、**共感的な子ども理解**から、保育の**環境づくりを改善し続ける**ことを課題としました。このカリでは、**方向を示す目標群**(心情・意欲・態度)方向目標になります。

## 生活の中での学び、非認知的スキルは不易の学びです

- つまり経験カリキュラムは不易の学びを支えるカリキュラムなのです。**人類は、ずっと、経験カリで育ってきたのです**。
- ですから、幼稚園、こども園では、教師、保育教諭はこの**経験カリに基づく実践の訓練**を改めて課していただきたいと思います。
- きれいなPDCAではありません。
  - ①まず朝「**きょう何して遊びたい?**」とみんなに聞いて下さい。昨日までのことを思い出し、**経験のつなげるための意識化**の時間です。
  - ②園では大小の**仕掛け**をたくさん用意しておきます。  
例：**アトリエコーナー キッチンコーナー、大工仕事コーナー**

- ③保育の中では、**子どもたちの観察**に今まで以上に力を注いで下さい。
- ④観察しながら、子どもに**共感して寄り添う場面を見つけて**下さい。そこで、子どもにあれこれ指示するのではなく、**なぜそんなことを？と不思議がる**くらいのスタンスで。
- ⑤できればそうした場面を**スマホ等で写真に撮り**、あとで**ドキュメンテーションづくりに活用**して下さい。
- ⑥保育の終了前、子どもたちにもう一度集まってもらって、「きょうどうだった？」と**振り返りの時間**を。そこで子どもたちの**体験を共有**するとともに、明日以降の**課題をみんなで見つける練習**を。
- ⑦その発言を含めて、今度は**保育者で振り返り**を。そこで「**子どもから今日学んだこと**」を出し合い共有を。
- ⑧それに基づく**環境構成の再工夫**を

## AI社会に生きる子を育てる際の不易と流行、新と芯

### ●AI社会を生きる際の人間の喜びは？

- ・何でも機械がしてくれる→喜びになりますか？
- ・一日直接かかわらないで用が済ませられる→うれしいですか？
- ・体を使って世界と対峙し文化を創る=からだに文化を刻み込む  
こともしなくていいよ→生きている喜びわかりますか？

- 変化が急激なAI社会では流行を追わねばならないことも増えますが人間の深い意味での生きがい、しあわせは、**むしろ人類の歴史と共に古い不易に求めるべき**と思います。

## 不易を大事にするこれからの保育 3つの柱

- ① **できるだけ自分の頭で考えて**、工夫し、アイデアを出し、試行錯誤して、最後に達成する体験をあらゆる場所で
- ② **体に文化を刻み込んで**、そのレベルをあげていくという育ち方をそれぞれの子どもが自分で挑む文化を見つけて実際に挑んでいく、そうした保育を
- ③ **人と協働する、コミュニケーションする、人の役に立つ、等を喜びとする**体験をいっぱいする、そんな幼児期を

## 幼児教育スタートプラン等は

- 以上のような視点がはっきりしているプランならいいのですが、系統カリが下に降りてくる傾向が強いものなら批判していくことも大事です。
- 大事なことは、我々が、ある意味しっかり考えて、時代にさおさした保育をめざすことだと思います。
- 職場で議論を！

## 【研究発表園】 将軍野幼稚園



## 主題 「子どもと共につくり出す「活動」と環境」を考える

～思いや考えを伝え合いながら主体的に遊ぶ姿を目指して～

指導助言者 聖心女子大学現代教養学部教育学科 司会者 小林 洋平 (飯島幼稚園)  
教授 河邊 貴子 先生 記録園 聖園幼稚園

## 1 主題の捉え方

当園では、「元気に生き生きと活動し、情操豊かで、思いやりのある子ども」を教育目標に、子どもが自由に選んで参加する遊びと、幼児期に子どもに経験させたい活動を組み合わせながら、日々の保育を行っている。当園の教育方針のもとに研究主題を設定し、子どもが友達の姿や周りの環境、素材などから刺激を受け、自ら「やってみたい」と取り組み、それまでの遊びや経験の積み重ねをもとに自分たちでアイデアを出しながら遊びを作り出していく姿を「主体的」として捉えた。その中で、子どものやりたい遊びやアイデアを形にするために必要な保育者の援助とはどういったものなのか、「子どもと共につくり出す」ための保育者の援助について研究も進めてきた。

5歳児の保育実践を例にしなが、子どもと保育者が共に活動を作り出す中での子どもの思いと保育者の援助のバランスを考えていきたい。

## 問 い

- 問1. 援助のバランス①  
～保育者が意図的に関わる時～
- 問2. 援助のバランス②  
～見守る援助の在り方～
- 問3. 保育者の意図と子どもの主体性について

## 2 研究発表の概要

## (1) 研究方法

日々の打ち合わせの中で遊びを振り返る時間を設け、気になった子どもの姿、迷っていることなどを報告し、援助や環境構成について周りの保育者からも意見を出してもらった。それによって、遊びの環境を再構成して発展させていくようなアイデアが

得られたり、他学年への遊びの意識が強くなった

りした。  
また、エピソード記録で援助の意図や子どもの思いを整理し、担任だけでは気付かなかった子どもの思いや様子を話し合うことで、子どもやエピソードに関する見方が変化した。時には、クラスの相関図を作ることで、新たな視点で子ども同士の関係を振り返ることもできた。記録から、遊びの援助や子どもへの関わり方、友達関係を改めて考える機会となった。他にも、園内研修や公開保育を姉妹園同士で行なったり、ビデオカンファレンスをしたりして、多くの視点から保育を話し合うことができるようにした。

## (2) 事例1 さくら組 迷路屋さん

5月末、『いろいろな友達と関わり、お互いの思いを言ったり、聞いたりしながら遊ぶ』というねらいの中、ごっこ的な遊びを子どもたちに投げかけた。すると、忍者や水族館、お化けコーナーがある迷路を作ることになり、各コーナーに分かれ制作が始まった。水族館エリアでは、子ども同士で役割分担をして遊びを進めていたので、保育者は様子を見ながら子どもたちに任せてみた。忍者エリアでは、遊びを進める中で、イメージが曖昧なところもあったので、保育者が子どもの思いを確認しながら関わった。お化けエリアでは、必要なものを作る中で、困っている時に援助するようにした。しかし、いざ驚かす段階になると恥ずかしさから驚かすことができずに遊びが停滞してしまった。クラス全体に解決策を投げかけてみたが、そこでも話がまとまらなかったため、保育者はどこまで援助したらいいのか悩みながらも、「大きな音を出してはどうか」と自分の考えを伝え実際にやってみた。すると、恥ずかしがりやの子どももやる気を見せた。

今回の事例では、子ども同士では考えが出ずに遊びが停滞してきた時には、年長児であっても保育者

がアイデアを出したり、一緒に遊んだりすることで、意欲や新たな発想につながると感じた。子どもは考えを出し、形にしていく主体だが、保育者も願いや考えをもっている主体である。お互いに考えを出して作っていくことも共に作り出すということにつながるのではないかと。

### (3) 事例2 ゆり組 プリキュアショー

子どもたちとプリキュアショーをすることになり、女兒はプリキュア、男児は敵役になった。全体で進めようとするとな何をしているのかわかりづらかったので、男女に分かれて話し合うことにした。男児は、技の名前やポーズを自分たちで決めていたので、任せてみた。女兒は、実際のストーリーの通りにしたい子どもとプリキュアがわからない子どもとの差があり、うまく遊びが進まなかった。そこで、みんながわかるように確認する場をその都度設けると、子どもたちは少しずつ同じ思いで遊びを進められるようになってきた。何日も相談の日が続くと周りの保育者からは「相談時間が長いのでは」「もっと保育者がアイデアを出してもいいのでは」という意見が出た。担任としては、保育者の考えを押し付けたくないことや自分たちで解決する気持ちが続いていることから、子どもの力を信じて任せてみることにした。

ストーリーが完成し、子どもたちからステージで発表したいと意見が出たため、実際に見てもらうことで新たな気付きがあるかと思いやってみた。発表後、他の保育者から衣装や立ち位置についてアドバイスもらったことで、自分たちで動きやさらなるストーリーを考え遊びが盛り上がっていった。

#### 事例1 についての感想・意見

**<参加園>**子どもたちがお化け屋敷に行った経験がないことで遊びが停滞してしまつたとあるが、保育者が経験したお化け屋敷のイメージを伝えることで、自分たちはどのように驚かせたらいいか考えられるのではないかと考えた。

**<参加園>**子どもに保護者と一緒に考えてきてもらう。親子の会話にもなり、ユニークな考えも出てくるのではないかと。保護者も園の様子がわかり、保育者と保護者のつながりになるのではないかと。

#### 事例2 についての感想・意見

**<参加園>**自分たちで考えたり、話し合ったりできる5歳児ならではの悩みであるなど感じた。先生がとことん子どもたちに任せたことで、自分たちの力でショーを完成させて達成感を味わっていたと思うので、援助として良かったのではないかと。

**<参加園>**新しいクラスが構成されて間もない時期に大きなごっこ遊びが子どもたちの力でできることに驚いた。子どもの力を信じて任せることも大事だと思うが、まだ4歳児の育ちに近い時期なので、遊びの過程をある程度方向づけてから子どもに任せるとしても必要なのかなと感じた。

**<参加園からの質問>**大きな遊びだったので、一日どのくらい遊びに時間をかけていたのか。

**<発表園>**クラスの活動としては一時間くらいだったが、その日によって活動時間は変えていた。ステージ発表は約30分、遊びの期間は約2週間くらいである。自由遊びから発生した遊びで、その後も衣装や小道具などを自分たちで作っていた。

## 3. 研究協議

### 問1. 援助のバランス①

～保育者が意図的に関わる時～

**<参加園>**先生だから意見を通すというのではなく子どもと同じ視点に立つように心がけていた。保育者自身がどうしたらもっと楽しんでいけるか提案していくことも大切だと思った。

**<参加園>**子どもと共に言った時に「先生の意見はね」というよりは、子どもの中に入って仲間として遊びながら伝えてもいいと思う。

**<まとめ>**

子どもに保育者の考えを伝えるというよりは、子どもと一緒に同じ視点で遊ぶ中で、モデルとしての保育者の役割や遊び込んでヒントを出していくことも大事ではないかという意見が多かった。

### 問2. 援助のバランス②

～見守る援助の在り方～

**<参加園>**見守る援助という面では、子どもの力を信じて任せることも年長児ならできると思う。保育者と子どもたちの信頼関係を感じられた。

**<まとめ>**見守る援助を大事にしながらかつて子どもたちの意見を整理したり、うまく対話をしながら進めたりしたことがうかがえた。

### 問3. 保育者の意図と子どもの主体性について

**<参加園>**保育者の声掛けによって遊びが変化して行くので、子どもが主体的に遊べるように様子を見ながら援助をし、一緒に遊びを進めていきたい。

#### 全体のまとめ

さくら組では恥ずかしがり屋の子どもが多かった

り、お化け屋敷の経験が少なく子どもたちから意見が出なかつたりしたので、保育者からもどんどんアイデアを出していった。ゆり組では積極的な子どもが多く、アイデアがどんどん出てきた。ただ、子どもたちの中で、イメージの共有が難しい部分もあったため、保育者は意見を整理しつつ、見守る援助をした。子どものタイプや、遊びに活かせる経験の有無、進行状況によって保育者も積極的に関わっていくか、子どもに任せるのかが変わってくる。どちらの事例にも、保育者がアイデアを出す、見守るなど両方の援助の要素もあった。

「幼稚園」という環境の中では、子どもと同じように保育者にも様々なタイプがいる。保育者同士がお互いに刺激を受け合い、一緒に考え対話をしていくことで、より良い保育ができると思う。

## 5. 指導助言

### 主体的で対話的で深い学びが実現できる遊びに必要なことは

子どもが何を面白いと感じ、何を考え、どうしようとしているか、どんな自分になろうとしているかなどを理解し、子どもの自己実現のためにどんな援助が必要か判断し、援助が必要な場合は、直接的な援助のほかどこにどのような足場をかけてあげるか（あたかも自分が乗り越えたかのように思える少しの手助け）を考えることである。「幼児理解」は極めて重要だが、「理解」は絶対ではない。子ども理解は保育者の主観（願いや主体性）なくしては生まれない。だからこそ保育者は常に「この理解でよかったのか」と迷いつつ、子どもが環境と関わって生み出す状況と対話しながら、「次」に向けての足場をかけるべきか、どこにかけようか考えている。

子どもの遊びが停滞した時にどんな援助をしたらいいかという問いに対して、援助が必要だと判断した時は、保育者も遊びの状況内存在（遊びの中の一人の存在）として意見やアイデアを提案するのがいいのではないかという意見が多かった。また、保護者を巻き込むことも良いと思う。保育者が意図的に関わる時とは、遊びが停滞している、人間関係のバランスが悪くなっていると感じた時、新しいものに出合わせたい時、遊びの活性化が必要な時である。その場合も状況内存在として提案することが子どもにとって嬉しい関わりだと思う。問2の見守る援助とは、安心の地場をつくり、見守られていることで

子どもが自信をもって行動することである。

年長児後半になると遊びの課題が多重化して目的も持続的になっていく。しかし、この時期に「みんなでお店屋さんごっこ」ということがどのくらい意識できたかというとなかなか難しかったかもしれない。

協同する経験とは、複数の子どもが共通の目的をもち、互いに調整し合いながらある一定の期間それに向かって活動を進めて実現していく過程のことであり、その過程を経て、協同性が高まっていく。さくら組の水族館エリアでは人間関係が深まっていたから話し合いが進んだが、お化けエリアではその育ちがまだ十分ではなかったのではないか。このように友達と相談しながら遊びを進める経験は年長の初期の頃には必要な経験だと思う。協同性は積み重ねが大切であり、人間関係が深まることと切り離すことはできないため、5歳児の一年間をかけて深めていけるようにする。そのためには、いざこざや葛藤を乗り越えて自己を回復し主張できるようになったり、友達の考えを受け入れたり、共生を喜びと感じる体験が繰り返し必要である。また、心を揺さぶる共有体験やものの意味づけの体験も必要である。そのためには、学級やグループの中で共通の目的に向かって相談するようなスモールステップが必要である。

小中学校の先生に行った研究では、環境に対して働きかけているか（主体的）と、他者や物との関わりを深める中で、自らの考えを広げ深める（対話的）ということは評価しやすいが、過去の体験を今の体験を結び付けて活用できる力（深い学び）ということの評価が難しいという意見が多かった。

<河邊先生から発表園への質問>

年長組のみんなでという意識はどの程度あったか。

これまで関わりやお店の経験はあったか。

<発表園>クラス替えは学年ごとにあるが、オープン保育の中で、これまでも学年全体での活動やクラスを超えての交流があった。年中組の2月に年長組からお店屋さんごっこに招待され、自分たちもしてみたいということになり、保育者も交えてお店屋さんごっこをした経験はある。今回はクラスでの活動だったが、お店の形を変えてだったり、他学年を交えてやったりしたこともある。

### 「遊び」と「学び」の関係

遊びとは、子どもが興味関心をもった身近な環境に

関わることによって生み出され、遊び手の自発性に支えられて展開する。環境はいろいろな意図が込められたり、偶発的な物があったりと幅が広い。自発性とは、面白い・楽しいといった心の動きと分かちがたく、それが原動力となって子どもは遊びがより面白くなるようにモノやコトやヒトに主体的に関わっていく。関わりが深まることによって遊びの面白さが増して子どもの興味関心がさらに高まるという循環が生まれ次の遊びに展開していく。学びの原理の中に子どもが最も興味関心をもって取り組むことが遊びという形態であり、小学校以降の教科学習と遊びは学びの原理でつながっている。

主体性という、自ら積極的に働きかけることに目が行きがちだが、「してもらおう」という土台も必要であり、そこから「してあげる」ことや「させてあげる」ことにつながる。積極的に関わるだけでなく、異なる形で表すことも主体性の形で見えさせる必要がある。保育者は、幼児に並んで共感し、対話をする、モデルになる、見守りながら理解し、ここぞという時に援助するなどがある。

### 「深い学び」の評価と ICE モデル

日本の子どもは知識だけ多く備わっているが、それが通用するかどうかわからぬ経験が欠如しているといわれている。よって、学習者自らが知識を求めて探求し、どう使って世の中を変えていくかが求められる。深い学びの評価として ICE モデルがある。次につながる「主体的な学び」、自ら考えを広げ深める「対話的な学び」、意味あるものとして捉える「深い学び」のことである。プリキュアショーや迷路作りにも ICE が見られた。ICE モデルを使うと保育の整理や見直しになると思う。

### つながりを意識した保育の展開

つながりを意識した保育の展開が遊びを中心とした保育では大切にされる。つなげる主体者は子どもなので、子どもの中に「つなげていきたい」と思う気持ちを育てることが大事である。体験が単発で終わるのではなく、一つの体験が次の体験につながっていく、多様に広がっていくことによって子どもの中に納得が生まれることを「経験」という。魅力的な環境（文化・教材・活動）との出会い、本物との出会いが ICE モデルの I（アイディア）につながり、遊びのテーマが生まれる。友達や保育者・保護

者・地域の人からの刺激や、寄り添い共感してくれる大人の存在も重要である。

### 保育者の役割

個の追及力と他児との協同的追及力が行き来し学び合う関係を支えることである。そのためには、一人一人の思いや考えを認め他者に投げかけていくこと、遊びに入れない子どもに周りの様子を伝えること、設定活動（一斉活動）を良いきっかけにする、ドキュメンテーションによる遊びの可視化によってイメージの共有を助ける、顕在的な経験と潜在的な経験の蓄積を読み取ることが大事である。

「待つ」「見守る」「受け止める」という共感的な態度をベースにしながら、子どもの経験を理解し、必要があればその延長上に援助の手だて（足場架け）を考える。状況内存在としてイメージ実現のため道具や物の提案をして手助けをする。「問題探索」の姿をすくいあげ、投げ返す、「学び合う関係性」を育て、支える。潜在的経験とは活動を超えて共有される経験、例えば自分のやりたいことにアプローチしていく力、友達と相談しながら遊びを進めること（非認知能力）、顕在的な経験とは、その活動ならではの経験で文化的視点が必要である。この二つのバランスがうまくいかないと遊びは面白くない。

<発表園より河邊先生へ>

自分たちがどういう心をもって子どもたちに関わるのか原点に戻って考えることができた。保育の中の援助の中で、「足場架け」によって保育をつないでいく土台作りになることを学んだ。計画しながらの援助のバランスをもう少し知りたい。

遊びを中心とした保育を目指す時に、長期の指導計画と短期の指導計画との連動が難しい。長期の指導計画は一般的な発達方向性が書かれていて、自然発達するものもあれば教育環境を用意しないと発達しないものもある。だから、幼児の姿があり、ねらい、環境構成がある。しかし、個には応じていないので、短期の計画を作るときに初めて目の前の子どもと付け合わせることになる。長期の計画に近づくためには、どんな環境や援助が必要かをみんなが意識して考えることで、教育課程や長期の計画、日々の保育が離れずに進んでいくのではないかと。

## 【研究発表園】 秋田幼稚園



主題 「遊びを通してこころ動かし学び合う姿を育む」

—遊びの中でこころが動く姿を読み取り、学び合う姿を育むための  
教師の援助の在り方考える—

指導助言者 宮城教育大学 教職教育総合学域  
発達教育部門 幼児教育運営部会  
教授 佐藤 哲也 先生

司会者 熊谷さやか (ひかり幼稚園)  
相原真希子 (ひかり幼稚園)  
記録園 ルーテル愛児幼稚園  
こまどり幼稚園・保育園

## 1 主題の捉え方

幼稚園での生活の中心はあそびである。子ども達は興味関心の赴くままに、自発的に人や物などの環境と応答し合いながら、様々なことに気づいたり、考えたり、イメージを膨らませたりと、こころ動かす体験や経験を繰り返している。また、友だちと協力しながら試行錯誤を繰り返す中で、自分の思いを表現して相手に伝え、相手の思いにも耳を傾け受け入れようとする中で、友だちと共に成長していくのである。このことから、あそびを通してこころ動かし学び合う姿を育むためには人とのかかわりが不可欠であると捉えた。

あそびを通して、子ども達一人ひとりの内面に何が育っているのか、また、人とのかかわりを通してどのような育ちが期待できるのかを探っていく中で、育ちに繋がる保育計画や環境構成・再構成、援助のありようの重要性を改めて感じている。教師が子どもの姿や育ちに想いを寄せ、かかわりの中でこころがどう動いているのかを丁寧に見取りかかわっていくことが、子どもの成長を手助けすることと、保育の質を高めることへとつながっていくのではないかと考える。

## 問 い

- 1 どういう環境によって学び合うところが育まれたと感じましたか。
- 2 どのような働きかけや環境構成が必要だと考えますか。

## 2 研究発表の概要

## ・研究への取り組み

「子どものこころの動き」「かかわりの中で共に育つ過程」「育ちを促す教師の援助・役割」の3つに視点を置き、園内研修を中心に組みこんできた。

1年次の研究は子どもがどんなことにこころを動

かしているのかを捉え、保育実践につなげていく方法を模索してきた。2年次の研究では、園内研修後の実践と、その後の変容について継続的に研究を進めたいと考え、各学年で対象児を決め、その姿を追うことにした。3年次の研究では、学び合うこころを育む為の環境構成に視点を置き、2年次の研究の対象児の育ちを継続して追ってきた。

## &lt;R男の事例～年中 友だちとかかわりの中で～&gt;

3年保育で入園。年中組に進級当初、自分の思いを言い出せず、不安や焦りを強く感じると吐き戻してしまうという姿があり、教師が寄り添い、R男の思いを代弁するなどしながら過ごしてきた。2学期になると、友だちのあそびに興味をもって一緒に遊ぶことを楽しむようになっていた。船ごっこを通して、O男、R太と一緒に遊ぶようになり、徐々にその中でなら教師を介さずに思いや考えを伝え合う姿が見られるようになった。しかし、この2名以外の友だちがあそびに入ってきて思い思いに遊び始めた際、R男は固まってしまった。自分のイメージがはっきりある為、友だちのイメージとの違いにどうしたらいいのかわからなかったのではないかと考えた。また、一方でO男とR太との関係の深まりも感じられた。その後のあそびの中で教師がイメージを可視化し、共有できるような援助をしてきたことで、自分とは違う友だちの発想を面白い様子も見られるようになった。

## &lt;R男の事例～年長 集団の中で～&gt;

個の成長が感じられる一方で、集団の中で苦手意識をもっている姿も継続して見られている。見通しをもてるような援助を心がけ、安心できる友だちと一緒に、繰り返し経験できる機会をつくってきた。また、参加できないことを受容したうえで、理由を探り、参加につなげていくきっかけをつくること

できないか様々な選択肢を用意した。実践を通して、R男にとっては、できない理由を探るより、出来たことの積み重ねが必要だと感じた。また、長い期間かけて取り組む活動やあそびには見通しがもて、楽しみを感じることに繋がるのではないかという考えに至った。

### ・考察、まとめ

年齢を重ねるにつれ、あそびが個から集団へと向かい、かかわりの中で様々な気づきや葛藤があることがわかった。また、実践後の子どもの変容と教師のかかわりを振り返る機会を作ってきたことで、教師の学びや気づきが線としてつながり、気になる子どもの姿も成長過程であると捉えることができた。育むための環境構成について、人的環境に対する意見が活発に交わされる反面、他の環境構成についての意見が出にくかった為、改めて他の環境構成について見直す機会を設けた。その中で、環境には様々な要素が含まれている為、子どもの置かれている環境が育ちにどう影響を与えているのかを見極め、足りないものを補う、発達に応じた物の提供の仕方、空間づくり、視覚的に働きかける教材の準備など柔軟に対応していく必要があるという結果に至った。

## 3 研究発表質疑

### 質問 1

現在のR男の姿を教えてください。(秋田県 いづみ幼稚園)

### 回答 1

運動会は全種目やり遂げることができた。導入を大切にしたいと思い、夏休みを利用してダンスの曲を聞くことや、旗作りをしてもらうことなど保護者にも協力してもらった。練習は改まって行うのではなく、自由あそびの中で繰り返し経験できるようにしたことで、R男も自然に輪の中に入ることができた。苦手なことはまだあるが、「やらないといけない」と気持ちを固めているので、その気持ちを認めて一歩前に進むのを待ちたい。R男が困っていると感じられることや言葉で伝えてきたことを受けとめ、一緒に解決をしていきたい。(発表園)

### 質問 2

R男といつも一緒にいる友だちは、R男にとって安心できる環境、人的環境としての友だちであると感じた。彼との関係性を教えてください。(指導助言者)

### 回答 2

一緒にいた友だちは支援を必要とする子どもで教師

の側にいる。R男も教師の側が安心するので、そのうち支え合い、互いに必要とする存在になっている。この二人の様子から、周りの子ども達も支援児に対するかかわり方の面で刺激を受け友だちが増えた。あそびも広がっている。(発表園)

・物理的關係からこころがつながり周囲に広がっている。まさに気づき合い学び合っている姿。課題があったり、気になる子どもだったりするが、その子どもがいるからこそ周囲の子どもの育ちにつながっている。(指導助言者)

### 質問 3

園と保護者との連携はどのようにとっていたのか教えてください。(青森県 千葉幼稚園)

### 回答 3

連絡帳や電話を使い、園と家庭での姿の情報交換をしてきた。昨年度は、園で吐き戻してしまうことを家庭に伝えると、家庭でも登園バスの時間が近づき急いで準備をしないと間に合わないといった時に吐き戻しがあるということだった。焦りを感じる時に吐き戻しが多かった。今年度も同様に情報の交換をしている。4月は張り切って登園していることを伝えると、仲良しの友だちと同じクラスになれたことを喜んでいるということだった。行事は緊張してなかなか取り組めず、家庭でも登園を渋り気持ち悪くなるということだった。本人の気持ちのペースに合わせて楽しく過ごせるよう情報共有をしてきたところ、2学期になると調子が良くなってきた。(発表園)

## 4 研究協議

### <問い 1 についての意見>

・楽しそうだなと思えるものがそこにあったこと、R男のこころが揺さぶられる瞬間にタイミングよく教師がかかわっていたことが成長につながったと考えさせられた。(秋田県 秋田太陽幼稚園・ベビー園)

・やりたいあそびがすぐできる環境が整っていること、周りの友だちが受けとめてくれていること、教師が気持ちに寄り添っていることがR男の成長につながったのではないか。(山形県 かしのみ幼稚園)

— 周りの子ども達がR男をどの様にとらえているか —

・製作あそびを通じてあそびが広がったり、友だち

の話をよく聞いてくれたりするので自然に友だちが集まる。

・活動になかなか入れないR男の参加の仕方を友だちは反対することなくその時に合わせて受けとめている。(発表園)

## <問い2についての意見>

・その子の個性や発達段階に合わせた対応が大切だと感じた。イメージを共有しやすい環境作りで、絵に表すところが良かった。(宮城県 やまと幼稚園)

・担任だけではなく園全体で話し合ったり、付箋を使い協議したり、みんなで見ているところが良かった。(青森県 愛育幼稚園)

## — 園内研修 —

各園では園内研修をどの様に行っているのか。

・各学年で集まって話し合いをする。支援児には全職員同じ対応ができるよう、支援方法を共有している。(岩手県 久慈幼稚園)

・付箋に悩みや気になる事を書き、グループで話し合い実践に移している。(秋田県 勝平幼稚園 ひよこ保育園)

## — 園内研修の課題 —

テンポは良くなったが、深まりが少なくなった。幼児理解や学びを深めるために取り入れていることがあれば教えてほしい。(発表園)

・園内研修は昼寝中など時間が限られている。意見交換ができないので、付箋を使って誰でも見られるようにしている。同じ課題になっている。(山形県 鈴川第二幼稚園このみ保育園)

## 5 指導助言 (佐藤哲也 先生)

### — 気になる子どもをめぐって —

① 安全基地・安全要因はなにか探る。(その子が何をよりどころとしているのか)

落ち着かない子ども、癩癩を起す子ども、または発達障害を抱えている子ども等、園生活の中で安定できる何かがあるはずである。何をよ

りどころとしているのか安定要因を探ることはとても大切である。特定のスペースや人間関係から、クラスの中のグループ、クラス全体、園全体へと成長と共に安全基地から生活圏に拡大していくのである。子どもは安全圏で生活することによっていろいろなことを学んでいく。何よりも頭と心と体、知性や道徳心、信仰、体を動かす感覚器官等、それを生活圏で使うことによって発達するといわれている。身近な人間関係、身近な物や事とのかかわり等、最も身近な物を通じて学んだことがやがて成長していき、複雑で困難な課題を解決していくうえでの基礎となるといわれている。R男をめぐる実践から、これからの人生や人として生きていく上での基本を先生や友達と共に生活していく中で学んでいったのではない。

② 長所を認め伸ばしていく (ポジティブ・アプローチ)

私たちは短所が気になるものである。また、100点満点の子ども像と照らし合わせると、マイナス評価をしてしまう。それは教育する側の教師も教育される子どもにとっても大変なことである。今ここに生き、存在しているだけですべての子どもは100点満点である。教師の仕事は100点を101点、120点にすることである。好きなことや得意なことを認め伸ばしてあげることがとても大事である。

あそびの中の学びは観察学習と模倣学習である。幼児のあそびのほとんどは見て、憧れて、真似をする。見て真似をすることによって一つのクラスの中で共存、共生していくのである。互いの生活の質をどう高め合うのか、これからの私たちの社会が必要としている生き方の現体験をR男の姿を見ながらみんなが学んでいくことができたのではない。

③ 他者との関係性(保育者や友だち)に注目する。(何を媒介に繋がっているのか)

保育、教育とは他者との関係性の中で育ち合うことである。自分のこころのよりどころや依存の対象は担任やサポートの先生であり、そこで愛着関係を結びながらやがて友達へと発展していく。そして互いに学び合い、学びの中から何かを作り上げようとしていくのである。媒介となるのは具体的なあそびやイメージ、プロジェクトの実現等様々である。園内研修や研究班として議論し子どもの真実、保育の世界について究明し探っていくことがとても大事である。

- ④ 幼児理解は保育者理解（なぜその子が、なぜその言動が気になるのか）

幼児理解は保育者理解である。学び合うところを育てるには教職員が学び合うところをもつことが大事である。なぜその子が気になるのか相対化し、自分自身をもう一つ違った目から見つめ直すような視点が必要である。

- ⑤ カウンセリング（自己開示、自己理解を促す）

挫折をした時に立ち直っていけるための手伝いをしてあげることがカウンセリングである。周りが話を聞き、引き出すことで点と点が繋がり物語が生まれる。一つの物語を提案することで自己理解を促すことができ、自分でなんとかしようとする力が湧いてくるのである。互いに自分のことを語り合えるような安心できる人間関係が園の中に成立してないとカウンセリングマインドに満ちた園内研究会は難しいのである。

- ⑥ コーチング（傾聴、承認、指示、評価）

園内研修では悩んでいる同僚の話をよく聞き、否定せず理解したうえで支持をする。そして評価もしてあげることが大事である。評価が伴うからこそ次の手立てが出てくるのである。

## — 子ども理解 —

子どもの姿はそっくりそのままそれぞれの教師に伝わらない。園の文化や教育、それぞれの経験や価値観というフィルター（先入観）がある。また、このフィルターは跳ね返すだけでなく、ある情報をゆがんで伝えることもある。目の前の子どもが教科書というが、ありのままの子どもをとらえることは難しいため、より柔軟なフィルターにしていくことが重要である。そのために、幼児の記録を取り認知することが必要である。それは自分の観点で幼児を理解しようとする試みである。しかし認知はフィルターによってゆがめられていることもあるため、記録を省察し、自分自身や自園を客観的にみていき（メタ認知）カンファレンスを行っていくことが大事である。本当の真実は分からないが保育の世界に答えはある。努力した結果、保育によって成果を還元していくとその子どもが育つ。それが真実ではないか。

## — あそび、育ち、学びの発展をめぐる —

子ども達は園生活を通じて安全基地を基盤としながら自己を実現する力と共に生きる力を育てて

いるのである。好きなあそびに思い切り取り組み、徹底的にものとかかわりながら自己表出する一方、他者への気付きが生まれるため、認めてくれる教師や同じ場を共有する友だちと繋がっていくのである。やがてやりたいという目的意識が出てきて自己表現するようになる。しかし、保育の世界はこだわった子ども達同士の織り成す生活であるため、対立や葛藤、和解もある。そのため自分とは違う誰かに対する自覚が芽生え、あそびのイメージや体のリズムによって友だちと繋がっていくのである。そして「みんなで」共通のイメージや目的意識をもち、役割分担をしながらあそびや生活を作り上げていく姿になり、プロジェクトの実現の中で自己が発揮されていくのである。協同的なあそびをしていくと身振り手振りではなく相談する必要があるため、言葉の共有が生まれるのである。このような広がりの中で、主体性と道徳性が育つのである。

## — 人的環境としての教師をめぐる —

カンファレンスをしながら間主観・それぞれのフィルターを柔軟なものにしていかなければいけない。教師が人的環境として必要なことが4つある。

- ① 子どもにとって教師は容姿が温かく、開かれた身体である必要がある。開かれた身体とは、自分の体の中心にあるへそを保育室や園庭などの真ん中に向け、子どもがどこにいても教師の姿が見えるということである。教師自身が目の前の子どもと対応しながら子どもの全体像を見て、子ども達からは教師の姿が見えることで安心感につながっていくのである。
- ② 教師の声が柔らかく、自然であるということだ。教師の声は子どもの普段のコミュニケーションにも影響してくる。教師の指導・指示を大きな声で話すと子どもも大きな声でコミュニケーションをするようになる。子ども達が耳を傾けたくなくなるような声で話をするのが大切である。
- ③ 具体的な援助として”気”（元気・本気・やる気・根気など）を操るということだ。まず、教師がモデルとなることであそびの場の雰囲気が出来上がり、子どもに寄り添いながら見守る”気を放つ”援助である。いつも教師が見ていてくれるという安心感や信頼感が育まれていく。次に子どもの取り組みを認め、励ましたり、時には注意をしたりする”気を入れる”援助である。

「もっと頑張りなさい」「それではダメ」と無理強いしたり否定したりしてはいけない。そして子どもと同じ目線で共に活動する”気を合わせる”援助である。子どもが今何を楽しんでいるのか、何をしたいのか等教師が子どもと共に活動することで伝わってくることもある。ただし、”気を操る”際、教師中心の保育になってしまうことがあるため注意が必要である。教師の援助がなければ遊べない・生活できない子どもになってしまい教師に依存してしまうことがある。子どもが自立し、自分の世界を語れるようになるために教師は”気を抜く”ことも大切である。子どものあそびや子どもの状態を見とり、適切なタイミングであそびから抜けることができるのが保育者である。

- ④ まなざしで保育をしていくことだ。客観的に子どもの姿を見るためには一步退いたところで観察したり見守ったりする”背後からのまなざし”や愛着を深め、目を合わせて勝負する”向かい合うまなざし”がある。そして「こころ」と「こころ」がつながって共感する”横並びのまなざし”があり、共感するためには物理的・心理的にも保育者自身にゆとりがないとできないことである。もし、保育中にゆとりがもてない場合は、子どもが帰った後に一日をしっかりと振り返り、「どうしてあの時あんな返事をしてしまったのか」「あの時気持ちを受け止めてあげられなかったな」など反省することで保育者として成長していくのである。園内研修や合同研修会での事例研究を進めていく際にもぜひ子どもに“気”を合わせ、同じ目線で研究して行ってほしい。

## 一 出合いを見とる室内環境の作り方 一

出合いを見とる室内環境の作り方として大切なことは、まず保育者のへそが保育室の真ん中に向けられていることである。また、保育室の中心を開けておくことでそれぞれのコーナーで遊んでいるあそびが真ん中で出合い、そこから新しいあそびやかかわりが増えていくのである。もし真ん中に一つのコーナーを設置してしまうと保育室全体がそのコーナーあそびのイメージに支配されてしまうからである。子どもが今遊びたいものを選択できたり、それぞれの幼児のことを前提に選択肢を用意したりする環境の構成が大切である。また、場合によっては環境の再構成を行ってほしい。個の育ちに合わせた環境の

構成で周りが育つこともあれば、そうではない環境に触発され、個が育つこともある。

## 一 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿をめぐって 一

「10の姿」とはこういう風に育ってほしいという完成された子ども像のことであり、幼児期までに10の姿を育てることができない園や保育者の質が悪いと言われているように感じる。児童文学者の一人、佐野美津男さんの「子ども学」では子ども像派と子ども観派の2つが上げられている。子ども像派とは期待される子どもの姿、資質・能力を想定して子どもを作り上げていくことであり、子ども観派とは子どもをめぐる意味・価値づけを探りながら、教育のありようを考えていくということである。子ども一人ひとりの意味づけや価値づけを必死に探り、どういう働きかけをすることによって子どもらしさを引き出せるのか、保育者は子ども観派でなければいけない。

浜田寿美男さんの資料にて・・・

人は手持ちの力を使って、この自然のなかを人とともに生きる。〈生活〉の場面、〈あそび〉の場面、〈学び〉の場面、そのいずれの場面でも、本来、その時その時の「手持ちの力」を使うほかないはずである。発達は、そうして生きていく時に生じる結果にすぎない。人はみな「いまを生きる」。

人は、手持ちの力を使って何かをして、そのことで自らが喜び、また人が喜ぶものを見て喜ぶ、そうした生き物である。「あそび」とは手持ちの力を使って今を楽しみ、今を生きるということ。そうして手持ちの力を使っていく結果として、次の「力」がおのずとついてくる。「発達」とは、本来、その結果であって、目標ではない。そうした「育ちの場」をつくるのが保育者の役割ではないだろうかと私自身も思う。

※広くいろいろな方に読んでほしい本の紹介

「10の姿」をこえる保育実践のために

編著者／井上寿美・佐藤哲也・堀 正嗣

著者／大川織雅・辻木慎吾・疋田美和・見元由紀子

## 【研究発表園】 幼保連携型認定こども園 ウェルビューいずみこども園



主題 「地域とのつながりを生かす」  
～園の垣根を越えた人・もの・事柄とのかかわりによる育ちを考える～

指導助言者 宮城学院女子大学  
教授 磯部 裕子 先生

司会者 武田 陽子 (にいだこども園)  
記録園 勝平幼稚園・ひよこ保育園

## 1 主題の捉え方

近年、子どもが育つ環境は大きく変化し人間関係の希薄さもとりあげられている。園の垣根を越えた園周辺の地域全体を生活の場と考え、そこにはたくさんのお出会いがある。園の垣根を越えた人との出会いや交流により、いろいろな人とかかわることを通して他者をあたたかく受け入れたり、思いやりをもって接したりする豊かな心の育みにつなげたい。地域の資源とのかかわりは自己肯定感を育み、主体的に人、もの、事柄にかかわる力につながるのではないかな。

そして、子どもたちなりに生活の場の居心地の良さや安心感、地域のあたたかさを感じ、生き生きと生活する姿につながるのではないかな。福祉複合施設という特徴をいかしたいろいろな人との交流や園の垣根を越えた地域そのものを子どもの育つ生活の場と捉え、親しみをもって人とかかわろうとする豊かな心の育みにつなげていきたい。

## 問 い

- 1 園の垣根を越えた地域との交流は子どもの豊かな心の育みにつながった内容となっているか。
- 2 新しい生活様式の中で、どのような交流の仕方があるのか。

## 2 研究発表の概要

## (1) 地域の「つながり」とは？

地域や地域住民のために園ができること、地域や地域住民が子どもの育みに参加することを通し、自信や自己肯定感、親近感、感謝の心、思いやりが育ち、子どもの生活の場や子どもの育つ場が広がるのではないかな。また地域の人たちが園と子どもたちの存在を知り関わってくれるのではないかな。

## (2) 交流活動を振り返る。

- ・日常的に施設の職員や利用者の人と触れ合える環境にあり、日常的に挨拶などをして親しみを持っている。
- ・地域の行事に多く参加しているが、呼ばれるだけ、見せるだけでは交流ではないのではないかな。
- ・子どもたちに経験させたいことを相手にも理解してもらって交流したい。
- ・0～2歳児の「交流」とはどんなことだろうか。

安心できる保育者との関わりから外へと目が向いていくのではないかな。保育者が子どもに代わって会話をし、知らない人から声を掛けてくれる人として子どもが認識して慣れていく。保育者を抛り所にしながら自分の社会を広げていく。担任や身近な大人とのアタッチメントが基盤となり、人を信頼し、様々な人やものに関わろうとする力につながっている。「ぼくも、わたしも」と小さい組なりの交流がはじまるのではないかな。

→地域との交流年間計画を立て、ねらいを考えた。

## (3) 実践

## ◆事例1 《3歳児》

「おじいちゃん、おばあちゃん、はじめまして！」隣接する特別養護老人ホームを訪問する。初めは緊張し戸惑っていたが、交流を重ねていくうちに保育者の仲立ちで少しずつ慣れ、心を開いて交流できるようになった。3歳児の関わりへの広がりや心情の変化が4・5歳児の主体的な交流へとつながっていく。

## ◆事例2 《4、5歳児》

「ウェルビューいずみこども園で一緒にあそぼう！」  
(近隣の保育園との交流)

近隣の保育園の子どもたちを招待し、一緒に遊ぶ機会をつくる。「小学校で同じクラスになるかもしれないね」等会話を楽しみながら、地域には仲良しの友達がいるという親しみや喜びを感じて欲しい。相手を思いやる接し方、関わり方を自分で考えて行動したり、発信していけるようにしたい。子どもたちは迎える側の意識を持ち、接し方や遊び方を考えた。「～してもらった、嬉しかった」の経験が「～してあげよう、してあげたら・・・」と相手を思いやる気持ちに繋がっていた。遊びを通して距離が縮まり打ち解けた。これは少し先の将来へとつながり、子どもたちにとっても大きな安心に繋がる。

## &lt;考察&gt;

- ・招待する形からのスタートであったが、双方の職員で活動内容について意見交換等をし、子どもたちがより活動に意欲的に参加できるようにしたい。

## ◆事例3 《5歳児》

「友遊サロンのおじいちゃんおばあちゃんとのふれあい」

地区の敬老会に参加したことから始まった。歩くこ

とが難しい元気に動けない人がいるかもしれないと気付いて遊びを考え活動を決めた。これまでの交流活動の経験が生きていた。柔らかな表情と拍手で迎えられ心を開いて活動を楽しむ。おじいちゃんおばあちゃんは守ってあげる、手伝ってあげる存在であることを何となく感じていた。喜んでもらったりありがとうと言われたりすることがきっかけとなり、今度は自分たちが優しくしてあげたいという思いやりの気持ちが芽生えてきていた。今度はこども園に招待し、子ども達がおもてなしする側ということ意識することで、はりきる気持ち、思いやりの気持ち、人の役に立とうとする気持ちに繋がって欲しい。

### 「おじいちゃんおばあちゃんいらっしやい！こども園へご招待」

園に招いて交流することになり、喜んでもらいたい、楽しんでもらいたいと準備する。拍手をしてもらったり、褒めてもらったりすることから相手に喜んでもらう嬉しさを味わい、自信に繋がっていた。自分なりに考えて行動する思いやりの気持ちが見られ、保育者がいなくても自分たちで会話やスキンシップを楽しむことができた。



#### <考察>

- ・恒例の地域行事に参加するだけでなく、一つ一つの活動に目的を持ち取り組むことで、子どもたちが主体的に活動できるようになってきている。交流での子どもたちの主体性を大切にしていきたい。
- ・出向くだけでなく、招待することでこども園を知ってもらい、地域の人にとっても身近なものになって欲しい。
- ・様々な機関とのつながりを継続していくことで子どもたちの親しみの気持ちを膨らませていくことができるのではないか。

#### ◆事例4 <5歳児>

##### 「お兄さんお姉さんとあそぼう」

##### (特別支援学校中学部の皆さんとの交流)

お互いに訪問をし、交流を重ねる。お兄さんお姉さんへの憧れの気持ちが深まっていった。コロナ禍でも交流を楽しめるようリモート交流を行う。画面を通して楽しく交流できるか心配したが、難なく楽しむことができた。やりとりの中で相手の



話を聴きたい、自分の思いを伝えたいという気持ちが現れていた。

#### <考察>

- ・リモート交流で手を繋いだり一緒に行動したりするような直接的なふれあいはできないが、コロナ禍でも楽しめるリモート交流の機会を増やしていきたい。

#### (4) まとめと今後の課題

- ・園と地域との連帯が子どもの豊かな育ちには重要である。園・家庭・地域が連帯することで子どもの生活の場が広がり、子どもの生活に関わる人が増えるのではないかな。
- ・安心できるたくさんの人・もの・事柄との繋がりは、子どもが自ら育とうとする力の醸成に繋がること気付いた。
- ・園の垣根を越えて色々な人と触れ合い、共感し合う体験を通して親しみを持ち、初めて会う人が段々と身近な人になっていった。人と関わる楽しさ、人の役に立つ嬉しさの気付きへと繋がっていた。
- ・コロナ禍での交流は画面の外の人の様子が分からない、実際に触って触れ合うことができないなどの限界もある。対面だからこそその仲良さの深まり、楽しさ嬉しさの分かち合いの大切さを改めて感じた。以前のようにどきどきしながら到着を待ったり、姿が見えなくなるまで見送ったりすることもないが、今後も様々な機器を活用しながら、内容を工夫して交流を継続していきたい。対面式交流こそその教育的な価値を捉え、リモート交流でもできる限りの対面式の交流のような育ちあいに繋がるよう工夫する必要がある。
- ・園を拠点として地域と子どもたちが繋がり合うことの重要性を感じた。園と家庭と地域が繋がると地域の人が子どもの育ちに感心を持つきっかけになる。子どもを真ん中に繋がり合うことは保護者にとっても居心地の良い地域、子育てしやすい地域、頼りになる地域になっていくのではないかな。園・家庭・地域が円滑に関わり合って育ち合えるように、園が拠点として繋がり合うコミュニティーを創造していきたい。

### 3 質疑応答

- ・質問：にいだこども園 齋藤 麻有子 先生  
施設内だけでない幅広い交流は子どもたちにも刺激や気付きが多いのではないかな。オンライン交流という新しい取り組みをしていることに驚いた。難しかったこと、実際の交流と違って戸惑ったこと等あれば教えてほしい。

→ウェルビューいずみこども園

発表者 山本 晃子先生

特別支援学校との交流は継続的に行っているが、園では機械の操作は得意な方ではなかったのが、支援学校の先生方に協力していただき、準備していただいた。お任せすることが多くなってしまったので自分たちも

スキルを身に付けていきたい。オンライン交流をしたが、やはり会って実際に触れ合うことで学べることの方が多と感じた。

・質問：新屋幼稚園 和泉 千穂子 先生

今回の研究を始める前からこういう交流をしていたのか。どのように始まったのか。どのように続けて行こうと考えているか。

→ウェルビューいずみこども園 山本 晃子 先生

福祉複合施設という特色があり、日常的に利用者の方と関わってきた。隣接した施設への訪問もずっと続けてきていたので、子どもたちも親しみを持って色々な人と関わられるようになってきている。地域に根差していることもあり、地域の行事に参加させていただき、やり取りが継続してできていることがありがたいと改めて感じた。実際に会って交流することが難しい昨今だが、できることを双方で話し合いながら、いつかまた会って交流できるように途切れないようなつながりを持って行きたい。

・助言、質問：磯部 裕子 先生

様々な交流を計画実践されていた。2年前に伺って見せていただいて、ある意味では交流しやすい環境であったけれども、そこに留まらず外に出て行ったり招いたりしている。交流が難しくなっている中でリモートという方法に出会って、保育の中で行っていることは画期的である。コロナ禍になったから始めましょうとしてもうまくいかなかっただろう。その前の土台があったからこそ実現したのだと感じ、良い実践の成果だった。

0～5歳児それぞれの発達段階に応じた交流を計画している。0歳児の「窓越しの交流」は交流の第一歩であり、なるほどと感じた。

交流が日常の保育内容そのものになっている。これからできるとすればどんなことがあるか、見通しを教えて欲しい。

→ウェルビューいずみこども園

園長 三浦 裕美子 先生

共生社会の中でのこども園として、園が地域にできることをもう少し考えていきたい。例えば園開放の時に来て遊んでいただくだけではなく、もっと気軽に園に足を運んでいただけるように発信していきたい。子育てについての相談をしたり、在園児との交流をしていただいたりできるようにしたい。地域の色々な方に園に足を運んでいただけるように発信していきたい。

## 4 研究協議

(1) 問い1について

・にいだこども園 高橋 綾子 先生

昨今では日常的に触れ合えることは貴重な体験となるのではないかと感じた。0～2歳児は人見知りするが、保育者との信頼関係を基盤として年齢や発達に合

わせて少しずつ交流の幅を広げていくことで、発表にあった5歳児のような交流活動に繋がっていくのではないかと感じた。自分たちが楽しむだけではなく、どうしたら喜んでくれるか話し合う姿等が印象的だった。それまで自分が優しくしてもらったことなどの経験が活きて、心が育っていることを感じた。

・勝平幼稚園 ひよこ保育園

副園長 佐良土 雅美 先生

日々の交流が土台となって繋がっていったことがよく分かった。受け身だった子どもたちが自分たちから関わりたいと変化していったことが豊かな心の育ちに繋がっていると感じた。自園では町内盆踊りを見に行ったら、卒園した小学生が踊っているのを見て、何年か後までも繋がっていると感じた。発表の中でのどきどきしながら待つ時間が大事という言葉が印象的だった。コロナ禍でできないことが多い中ではあるが、収穫物を届けながら地域の方と繋がる機会をつくるなどして今後も交流を計っていきたい。

・にいだこども園 原田 未来 先生

ありのままの子どもの姿を受け止め、保育者が笑顔で交流する姿を見せることが大切と感じた。窓越しの交流、散歩中に地域の人と保育者が会話すること等が人との信頼関係を築く基盤となっていると思う。コロナ禍で地域との関わりが少なくなっているが、対策をとりながらできることを考え、地域との関わりを日常的に持てるような環境を整えていきたい。

(2) 問い2について

・にいだこども園 菅原 麻由美 先生

事前に手紙のやり取りをする等、互いに親しみを持った上でリモート交流することが効果的ではないか。新しく何か始めるというよりは、今まで対面で取り組んできた交流が途切れないように相手と連絡を取り合い、規模を小さくして少人数でできる交流を続けていく方法もあるのではないか。

・新屋幼稚園 相原 恵美理 先生

ボランティアを募集して畑作業を通じて交流している。また周辺の地域の学校の子どもが園に職場体験やボランティアで訪問して交流をしてきた。今後も人数を制限したり感染対策をしたりして続けていきたい。

・向陽こども園 園長 日景 陽司 先生

園内で話し合い、コロナ禍でできること・できないことをはっきりさせた。その中で5年生と年長が一緒に稲刈りをした。屋内より屋外ということで、選りながら行っている。

## 5 指導助言

●子どもの育つ環境【遊び場（空間）・仲間・時間】の変化

子どもたちにとっての地域というものが喪失しつ

つある。

●地域に何があったのか

かつての遊び場は大人に管理されない空間だった。指導者ではない大人や他者がいて遊びは何にでも変身できる空間があった。仲間は、学校とは異なる価値観で人間関係が生まれてくる。また、自然に異年齢同士が会う。しかし、面倒な関係が生まれる。例えば、友だち同士で遊んでいる高学年のところに幼児が入ってくる。高学年は、同じルールで遊べないので幼児をどうするか考えなければならない。時間は、暗くなってきたら遊ぶのをやめよう、お腹が空いたから遊ぶのをやめよう、後から遊びの中に入る子どもは、最初に遊んでいた子どものルールを真似するなど子どもたちにとってゆるやかな自然な時間の流れがあった。このようにかつて地域に遊び場と仲間と時間があった。これらがあることで子どもたちは、様々な関わりを学んできた。

●子どもの体験の構築

◇体験できなくなったものをどうするのか

縦割り保育、異年齢保育は、保育者が意図的につくっている。かつて、地域の中で体験できたことが体験できなくなった今だからこそ意図的に計画しようという動きになっている。体験の構築の唯一の可能性を生み出す場は幼稚園・保育園・こども園であるのかもしれないということを考えていかなければならない。

～ウェルビューいずみ子ども園の実践から～

●大好きを広げていく

人や物を好きになる大前提として人や物を知らなければ好きにはなれない。知るだけでは好きにはならないので触れ合うことが大事。他者という存在を知っていく。

●地域の宝物に出会う

子どもたちが地域の宝物に出会うということはどういうことなのかと考えたときに私たちの地域の凄さ(自然、人物、文化、歴史)に出会うということ。

●交流活動

交流は、他者に出会うということ。一方通行の出会い、交流とは言わない。行ったり来たりがあつて初めて交流が生まれていく。

●イベントとしてではなく・・・

イベントとしてではなく交流することに意味がある。例えば、敬老の日に老人ホームの訪問をするという行事を考えてみる。年に1回は、行ったり来たりの交流は生まれない、交流というのは、他者をよく知ってこそその交流。関係を深めることは子どもたちが他者の存在を感じながら生きること。

●「関わり」から「関わり合い」へ

◇一方通行の場合は、「関わり」

◇「交流」の意味は、「関わり合うこと」

交流の意味は、単なる関わりではなく関わり合うということになる。お互いに育ち合う関係になる。

●地域の拠点としてのこども園

自分の好きなことができる空間が保障されているかを見直していく必要がある。保育者に管理されすぎている空間になっていないかを再考する。この人に会えてよかったと思えるような関係が成立するような生活が実現しているかを考える。遊びを通して学ぶためにたっぷりとした時間が必要である。

●環境の変化は関わりの変化を生み出す。

関わり合いが生まれるような状況を園の中で作り出していく必要がある。

●事例1 学び合う他者に出会う

一致し方ない存在としての他者一

・5歳児が泥んこでチョコレート屋さんをしている。そこに3歳児が「チョコレートちょうだい。」とやってくる。5歳児同士のやり取りでは葉っぱをお金に見立てて遊んでいたが3歳児が入ってきたことによってお金のやりとりなしでひめりんごのチョコレートケーキをあげる。3歳児は、嬉しかったのだが「わたしは、うるひとになりたい。」と言う。5歳児は困る。めんどくさいな・・・と思いながら5歳児はやり方を教える。お客さんと呼んで来てほしいと3歳児に役割を与え、「チョコレートやさんあるよ。きてください。」と声を掛けに行く。その後、5歳児に教えてもらいながらお店屋さんの中に入ってだんだんと5歳児のように遊ぶ。そうこうするうちに独立し、チョコレート屋さんの隅っこを借りてやきいも屋さんが展開していく。

→保育者に教えてもらうことなくとも5歳児なりに3歳児への振る舞い方を覚える。3歳児は、特別扱いが嬉しかったが5歳児と一緒に遊びに入っていくことも考える。関わりの中で子どもたちが学び合う。面倒な関わりをする中でお互いに関わり合い方を学び合い育っていく。時間、場所、仲間を用意できるのは保育の場である。

●事例2 それぞれの地域の宝物

・縄ないの先生の凄さに出会う。おばあちゃんに教えてもらう文化が保育内容となる。地域の文化は保育環境の一つ。

・郷土料理をつくってくれるおばあちゃん。給食に出して食べている。郷土料理とは地域の歴史と文化が生み出したもの。こういったものに出会えるのは、園が地域にあるから。

→園の中にはいない宝物に出会う。地域には〇〇先生がいっぱいいる。

●「地域の拠点」の意味

東日本大震災、大きな災害に出会ってしまう。その時に先生方はどうしたか?どんな事態でも保育はできる。

●地域の子育ての専門家として

子育ての専門家は、避難所の片隅や仮設の保育室で保育をした。

●情報を集約して

・災害時は非常時。日常の当たり前が崩壊する時。その時こそ専門家の力が必要。

- ・ 専門家の力の一つは情報収集能力とネットワークづくり
- ・ どこに何があるのか、どこにどんな専門家がいるのか、その情報を把握している私たちでありたい。

● 子育ての専門家がいる

◇ みんなが集まる避難所で・・・

- ・ 子ども用の非常食
- ・ アレルギーの子どもの対応
- ・ 障害のある子どもの対応
- ・ 授乳する場所
- ・ 困ったこと、不安なこと、相談したいことがいっぱい

◇ こども園は地域の避難所

→ その備えをしておきたい

● 地域の復興

◇ かつての時代に戻れない

◇ A I の時代、Society5.0 の時代となった時、子どもを取り巻く新たな社会をつくり出していく必要がある。それができるのが子どもを知るこども園、幼稚園、保育園なのではないか。

● 子どもが育つ「場」として

◇ ひと、もの、ことがあってこそ

- ・ 人・・・多様な他者
- 関わり合うことで学び合う

- ・ もの・・・文化としての物

→ 自然の産物、人が作り出した産物（知恵、技術、美）

- ・ こと・・・物語としてのこと

→ 意味のある出来事を再生する

● おわりに 関わり合うことの再考

◇ コロナ禍の生活から見えてきたこと

- ・ 関わり合うところに「社会」がある

◇ 新しい生活様式

- ・ 保育における新しい生活様式

● 助言者からのメッセージ

コロナ禍での生活を余儀なくされている。この生活から学んだことは、たくさんある。保育における新しいツールを使って知恵を生み出し、新たな生活様式を作り出さなければいけない。これまで大事にしてきたこと（ひと・もの・こと）をこの時代に作り出すことが求められている。リモートの形でもこんなふうに学び合える仲間も大事な地域の宝物なのではないかと思う。秋田の地域の学び合える仲間がいることに感謝し、地域のため子どものために力を尽くしていかなければならない。



## 【研究発表園】 幼稚園型認定こども園 追分幼稚園 附属追分ベビー園



## 主題 「五感を通して味わい、感じ、気付く芽を育む」

～園内の自然環境を生かして～

指導助言者 福島大学  
名誉教授 大宮 勇雄 先生司会者 佐々木 優 (四ツ小屋)  
記録園 のびのびこども園

## 1 主題の捉え方と問いについて

今日では、自然が減少しつつあり、交通事故等の安全面の不安や保護者の就労など、様々な事情により子どもたちが十分に体を動かして遊べないだけでなく、自然や四季を五感で味わう経験も少ない現状にある。当園の恵まれた広い豊かな環境下で、多くの友達と思い切り体を動かして遊び、各季節ならではの自然に触れ、喜びや驚きを友達や保育者と共感したり、不思議に思ったことを子どもなりに考えたり、五感を通して味わい感じることは、生きる力の育ちにもつながっているのではないかと考える。保育者間で五感のとらえと発達段階のとらえを共通理解し保育に当たることで、保育者は同じ目線で子どもたちの主体的な活動を支えることができ、子どもたちの生きる力の育ちにつながる成長過程へと生かされていくのではないか。

## 問 い

- 1 保育者が同じ目線で子どもたちを支えるための共通理解を図る具体的な方法
- 2 園全体で子どもの育ちを継続して見取るための手立ての工夫
- 3 自然を生かした遊びや活動の広げ方の工夫

## 2 研究発表の概要～子どもの姿と実践～

## (1) 五感のとらえと発達段階のとらえ

五感のとらえと発達の段階のとらえを年齢ごとに表にあらわし見える化し、子どもたちをどんな姿に育てたいか、保育者間で共通理解していく。

## 【3歳児】

五感を通して触れる、知る、やってみる

## 【4歳児】

五感を通して友達とかかわりながら、一緒に遊ぶ楽しさを味わう

## 【5歳児】

五感を通して友達と一緒に考える、工夫する、広げる

## (2) 子どもの姿 (5歳児エピソード)

園庭に咲いていた満開の桜の花。その桜の花も4月末には散り始め、一面が桜の花びらでいっぱいになった。子どもたちが見つけ目を輝かせながら桜の花びらを集めた。一人の女の子が両手いっぱい花びらを持ち「せーので上に上げてみよう」と提案し、友達も賛同する。花びらがひらひらと舞う。周囲で見ていた友達も誘い繰り返し楽しんだ。最初はそれぞれの場所で投げていたが、横一列に並べばもっときれいでみんなで見られるということに気づいた子どもたち。次々にアイデアが出てきた。一度散った桜の花びらが、子どもたちの力で再びキレイに咲くことができた。

発見を喜び合い、遊びにつなげていく。楽しむ中でアイデアが生まれていく…一度散った桜の花びらをもう一度咲かせようという発想が面白いと感じた。子どもたちから次々に「こうしよう!」というアイデアが出てきたため、保育者は見守ることにした。花びらをただ投げるだけでなくどうすればキレイに見えるか、たくさん咲かせることができるかを考え楽しむ中で、友達の意見を尊重し、認めるというやりとりが自然に生まれていったことに驚き、子どもたちの心の豊かさが表れている遊びだったと感じた。気付く、実践する、納得するまでやってみる、そして成功の喜びを共感し合うという経験を子どもたちと一緒にたくさんしていきたい。

## (3) まとめと今後の課題

研究を進めていくにあたり、保育者間で育てたい子どもの姿や、五感のとらえと発達段階のとらえを明確にし共通理解した上で保育に当たると、保育者は同じ目線で子どもたちの遊びや活動を支えることができ、改めて共通理解することの重要性を再確認できた。また、毎日の子どもの生活や遊びにはひとつひとつ意味があり、それを記録から保育者同士で考え話し合うことで、次につながる援助を見出せることができたと考える。今後は、記録や指導案を工夫し、PDCA サイクルを生かした教育課程の改善につなげるようにしていきたい。

### 3 質疑応答

司会：研究発表についてご感想やご意見を受け付けたい。

秋田県あさひかわこども園：今回の研究発表の中で自然が不自然にならないようにということが書かれていた。自然を生かし本当に子どもたちと共感していかないといけないことでもある。保育者同士の話し合いで、多角的多面的にとらえることがわかりとても参考になった。五感のとらえ方では、課題を見える化するのには本当に大切なことだと思う。これからも保育の中で参考にしていきたい。

青森県ひばり幼：研究発表を聞き、園外での活動も増やし、また五感を通していろいろなことを感じて、子どもたちと一緒にかかわって遊べるように取り組んでいきたいと思った。とても参考になった。

### 4 研究協議

司会：問い1「保育者が同じ目線で子どもたちを支えるための共通理解を図る具体的な方法」についてご意見などをいただきたい。

秋田県にいだこども園：子どもの育ちや変化を見える化し、子どもの姿に気付いたことがあれば、付箋などで書き足すことで、自分では気付かない育ちが、見えてくるのではないかと思う。それを参考に保育者同士で話し合いや意見を出し合う場をもてば、共通理解につながり、子どもたち一人一人についても深く知っていけるのではないかと思った。

司会：実践例などについてお話をしていただきたい。

岩手県聖パウロ幼：子どもの気付きをその場で終わりにするのではなく、可視化し、子どもたちと楽しく描いたり気付いたり発見したりしていける活動はいいと思った。私たちの保育でも取り入れたいと思った。

山形県若草幼：改めて園の環境を保育教諭が全体で見直し、保育者も今まで気が付かなかったところに気付けるのではないかと感じた。

司会：問い2「園全体で子どもの育ちを継続して見取るための手立てと工夫」についてご意見などあればお願いをしたい。

秋田県土崎幼：各担任がとっている記録を、園全体で目にするのは難しいが、その日の出来事を保育終了後に話題にして言葉で伝え合うことを増やすようにしている。そこで情報交換できたことが、全体で共有できることと、継続して見取ることに繋がっていくと考えている。

司会：全学年の共通理解は難しいが、子どもの育ちを見取る上で気を付けていることをお話いただきたい。

秋田県高清水幼：園内研修を通して、各クラスの子どもたちの様子を他学年の先生方が見て、午後にか

ンファレンスを行い、子どもたちの様子や保育者のかかわりを話し合う機会を設けている。話し合いの記録をもとに、園内の見えるところに掲示をし、子どもたちの育ちを継続して見ることができるようになっている。

司会：問い3「自然を生かした遊びや活動の広げ方の工夫」についてご意見などをいただきたい。

秋田県こまどり幼：今回、不思議な石ということで、軽石を保育者が水に入れてみることを提案していたが、軽石の性質を知らなかったのか、子どもたちと話し合いをしていく中で提案してみたのかをうかがいたい。また、別の石を入れたのは、子どもたちがやってみたいと続いた事例か、先生がタイミングをみて工夫をしたのかをうかがいたい。

司会：軽石の事例の経緯やエピソードを発表園からお話をしていただきたい。

秋田県追分幼：軽石の事例は、どうしたら軽石というものが目に見えて分かるかを考えた。他の石を入れてみたいというのは、他の子どもの発想だった。よい機会だと思い、子どもの反応を見て、子どもたちが気付けば子どもたち同士で広がっていけばよいだろうし、理解が難しいようであればヒントを与えていこうと思った。子どもたちが下に沈んでいるという違いに気付き、軽い重いを感じたようだったので、その時は子どもたちに任せた。

司会：園の環境の中で実践している工夫、難しく思っていることなどあれば、お話をいただきたい。

青森県中央短期大附第二幼：自由にのびのびと広い園庭があるので、そこでいっぱい遊び、遊んでいる様子を見守り、何に興味に向いているのかをよく観察し、その興味に向いたものから、年齢に合わせて制作や、ゲームに発展していけるように様々な工夫をしている。

岩手県なでしここども園：環境については会議で共通理解していろいろ工夫し、季節に合った自然の遊びなどができるようにしている。子どもたちの成長に合わせて対応できるように、園庭の自然や遊具なども工夫して作り直し、配置も考えていき、子どもたちが十分に遊び込めるようにしている。

山形県東谷学園：近くの公園にどんぐり拾いに行き、どんな制作ができるか、子どもたちに聞きながら進めている。どんぐりも、いろいろな形や大きさがあり、年齢に合わせた制作遊びをしている。

司会：それぞれの園のいろいろな環境の中、様々な工夫についてお話を聞くことができた。

### 5 指導助言

今、私たちはどんな時代を生きているのか、そしてこれまでと同じでいいのかを問われている。新たな世界をつくり出す力を子どもたちに身に付けさせ

て育てることが、大会テーマに含まれるのではないか。

最近、学びという言葉がよく使われる。これは教えるというより、学ぶことに大きな価値と意味がある。自ら学び続ける人間を育てることが転換期にある時代には必要である。では、学ぶ力（学びを生み出し深めるもの）とは何か。知識やスキルを身に付けていくことだけが学びではない。子どもが何かを深く学ぶ時は、ほとんどの場合子どもたちが本気になった時、あるいは真剣になった時、熱心になった時である。本気になるということは、子どもの感情＝気持ちに深くかかわっている（「非認知的なもの」なものともいわれる。）しかし、気持ちはその子どもの中から生まれてくるので、外からは簡単に教えることはできない、またコントロールもできない。確かに学びは大事だが、簡単に教えることができないような気持ちが、学ぶ力において大きな役割を果たしている。その「真剣にやる気持ち」を育むには、保育の中でどのようにしていけばいいのか。それが「心が動くような体験や出会いはどのようにして生まれ、それが発展し、どのように成長につながるか」というこの分科会のテーマの意味だと考えていい。そのためには、保育者がその育つ道筋をある程度理解していることが必要であるが、環境などで左右されることもあり、簡単ではない。今回の追分幼稚園の研究発表は、子どもの学びに注目するところが大きな特徴であり、保育者がどのように働きかけ、援助するかがテーマであり、また子どもの学びというところから、どのように子どもが心を動かすのか、それがどのように発展していくのかが、大事なポイントだと思う。

次に、「心が動く体験」とはどのようなものか、それを三つに分けて整理してみたい。第一は関心を持ち熱中すること。子どもが「なんだろう」と目や耳などで感じるものが関心であり、熱中とは感心が続き「明日もやりたい」と繰り返し続いていくことである。その子どもの視点に立った時に関心が見えてくる。子どもが自ら心を動かすことが学ぶ力として大事になる。

二つ目に重要な心の動きは困難に立ち向かうこと。どんな些細なことでも難しいことに立ち向かうことは、価値のある学びである。答えがわからなくても立ち向かうのが挑戦だ。考えたり、調べたり、実験したり、観察したりすることが続いていくと、とても価値のあることへの挑戦となる。

三つ目は他者とともに学ぼうとすること。人間の学びの特徴は、一人でできるようになる前に他の人の助けやアイデア、感情や気持ちを借りて、他者とともにできるようになることだ。他人の意見や考えや声を聞いて、自分になかった視点から物事を考

えることが思考力を育てる。対話することは協同することである。対話がたくさん生まれることが、心が動いていくことになる。

協同する力とは、自分の考えや気持ちを表現する、相手の立場に立って考えたり行動したりする。学んだことを伝えたり、表現して相手に伝えたりすることで学びが続くようになる。その中で子どもたちは友達に目が向くようになる。

このような形で心が動くときに自然とのかかわりなどの中で学ぶ力が育つ。

- ①関心を持ったり熱中したりした時に心が動く。
- ②難しいことに自分からあきらめずに立ち向かう。
- ③コミュニケーションする相手の立場に立とうとする。学ぶ力はその子どもの気持ちから生まれていく。子どもが自らやろうとすることに大きな価値があることを子どもに伝えることが保育者の役割として大事になる。

自然とのかかわりを育てることは、何歳になれば自動的にできることではなく、関心と熱中を先生が共感する中で子ども同士の対話や助け合いが生まれ、それが探求心を生み出し、また子どもたちの対話を豊かにする、そういう三つの心の動きが相互に影響し合う形で育っていく。

保育者のかかわりや援助を考えると、子どもの関心や援助は実に多様であり、一人一人の子どもによって異なってくる。挑戦はその子どもにとっての難しさにある。また他者との関係は計画することが難しいため、まえもって保育する側で作る計画や目標はあくまでも目安と考えたほうが、一人一人の子どもの視点に立ちやすくなる。

学びは長期的に育つ。その過程をとらえるのは非常に難しいが、長く続く学びを育てるために記録を重ねて振り返る。記録は学びを育てるためにやるものであり、学びのとらえ方が大事になる。

学びは協同的と話したが、子ども自ら先生に話したり説明したりすることが、学びを続ける大きな原動力になる。また対話以外の手立てとして、描いたり、作ったりする非言語の対話、つまり表現や記録の活用をしていくことも大事である。

事例2「ダンゴ虫に心臓はあるのか」の中で、保育者が子どものやっていることや心を動かしていることを価値のある学びとして認める。それが子どもたちの中にも伝わっていく。学びは長期的で複雑でとらえ方が非常に難しいところがあるが、記録をとり担任の目だけではなく複数の目で振り返ることが必要である。また、豊かな見方ができるように答えを一つに決めてかからない話し合い、つまり対話をしていく。保育者は多様な育ちを受け入れ、豊かな見方ができるようになることで、一人一人の育ちを励ます手がかりが見えてくる。

## 【研究発表園】 幼保連携型認定こども園 外旭川わんわんこども園



主題 「幼小の円滑な接続のあり方」  
～見通しをもった生活や遊びを通して、幼小の接続の視点から健康な心と体を考える～

指導助言者 秋田大学  
教授 山名 裕子 先生

司会者 丹 由紀子（港北幼稚園）  
記録園 御所野幼稚園

## 1 主題の捉え方

幼児は安心できる環境、あたたかな触れ合いや自己肯定感を基盤とし、遊びや生活の経験を積み重ね、様々なことを学んでいる。自ら考え、主体的な生活を送る中で、生活や遊びに見通しをもちながら、健康で安全な生活を過ごしている。幼児の楽しいと思っっていることや好きなことに集中し、自ら取り組もうとすることが、幼児期の学びの芽生えとなり、小学校の自覚的な学びにつながっていく。そのために「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を幼小で相互理解し、円滑な接続を図ることが大切であると考える。

## 問 い

- 1 健康な心と体が密接に絡み合って成長していく過程が、どのような学びの芽生えとなっているのだろうか。
- 2 自ら見通しをもった遊びや生活をするためには、どのような体験や環境構成、保育者の関わりが必要なのだろうか。
- 3 園での子どもの様子を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を通して、具体的に伝えより一層小学校との円滑な接続を図るためにどのようなことが必要なのだろうか。

## 2 子どもの姿と実践

## 「ドッジボールでのM子の姿」

〈M子の姿〉

- ・穏やかな性格で、生活面でもマイペースである。
- ・一見すると感情をあまり表すことがないように思われる。
- ・積極的に体を動かすことよりも、安心できる友達とじっくりと遊ぶことを好む。

## 《M子に着目した理由》

- ・積極的にドッジボールをやろうとする子、友達との関わりが多い子、やる気満々な子など目に付く

子はたくさんいた。

その中でM子にした理由は、

ドッジボールにあまり興味がなさそう。

体を動かすことがあまり得意ではなさそう。

それなのに、ドッジボールに参加した、意外な姿を見て、M子にとってドッジボールがどのような意味のあるものになるのか探りたいと思った。

## 【事例1】「私、外野になる。」（6月頃）

昨年、年長児と一緒にドッジボールをしていた男児数名から、「ドッジボールやりたい！」という声がかかる。保育者がラインを引いていると、興味を持った子ども達が集まってきた。その中にM子と、仲良しのK子の姿もあり、ドッジボールが始まった。保育者が「外野になりたい人いる？」と聞くと、M子は手を上げ、保育者に促されながら外野に行き、「私、外野になる。」とつぶやいた。M子が仲間に入ったこと、自分から手を上げたことに、保育者は驚いた。それを聞いていたS男とA男が、「M子ちゃん、外野がいいよ。」「内野になったら、すぐに当てられちゃうし、痛いからね。」「だから、外野守ってて。」とM子の背中に手を置きながら寄り添うように声をかけ、M子は「うん。」と頷いた。S男の言葉通り、一步も動かずにいる姿がM子なりに外野を守っているように見えた。

## 保育者の思い

- ・M子が仲間に入ったこと、自分から手を上げたことに驚いた。そのときのM子の気持ちはどのようなものだったのかな。
- ・S男とA男の二人は外野・内野の経験があったのか、自分達の知っていることを教えようとしていた。M子への寄り添い方が優しいな。
- ・ドッジボールをしている時のM子の表情は、終始穏やかで、仲間に入っていることを喜んで見えるように見えるな。M子なりに楽しさを感じているのかな。



### 【事例2】「負けちゃった…」(7月中旬)

K子が仲間に入ったことで、M子もドッジボールに加わった。M子は外野を希望するが、じゃんけんでは負けてしまい涙ぐむ。しかし、仲良しのK子と同じチームになり、涙を拭いてドッジボールに参加した。ドッジボールは白熱し、M子とK子が最後の二人になった。保育者や友達に「逃げるの上手！」と褒められ、M子は笑顔を見せたが、その直後、ボールが当たってしまう。ちょうど時間になり、M子とK子のチームが負けてしまった。K子が「私、負けちゃった。でも逃げるの上手だったよね！」と笑顔で保育者に話していると、M子が走り寄り、「K子ちゃん、すごーい。」と声をかけた。K子がM子に「二人で逃げれたよね！楽しかった。またやろうね！」と話しかけると、二人は笑顔になった。保育者や友達に褒められて嬉しい気持ちから走り寄る姿に、今までとは違うM子の変化を感じた。数日後、みんなで集まり、話し合いをしている途中で、H子がM子の様子に気付き、「どうして泣いているの？」と声をかけた。そのH子の声を聞いて、周りの子ども達もM子が静かに泣いていることに気付いた。「負けちゃった…」というM子の言葉から、周りの子ども達の表情が変わり、そばにいた女兒2名が心配そうに背中を撫でた。今まで感情を表すことがなかったM子の涙に、周りの子ども達や保育者も驚いた。

#### 保育者の思い

- ・外野での安心感のある体験があったから、外野になりたかったのかな。
- ・M子は、K子と一緒にチームになったことから気持ちを切り替えたのかな。
- ・外野になれなかったけれど、K子と一緒に周りから褒められて嬉しかったのかな。M子がK子に走り寄る姿に、今までとは違うM子の変化を感じる。

### 【事例3】「あー楽しかった！」(7月下旬)

小学1年生になった卒園児が、こども園に遊びに来る「おさとがえり」が行われた。年長児は、一年生がドッジボールをしている姿を見て、ボールを取

ったり、投げたりするごとに歓声を上げ、迫力に驚いていた。M子も「がんばれー」と応援したり、拍手をしたりしていた。その後のドッジボールでM子は何度もボールを投げていた。ボールの勢いは弱いが、M子の投げている姿に気付いた周りの子ども達から「ボール前に飛んでるじゃん！すごい！」と褒められ、M子は嬉しそうに微笑んだ。保育室に戻る時に、「あー楽しかった！」と、普段聞いたことのないような大きな声で一人話すM子の姿が見られた。

#### 保育者の思い

- ・1年生の話聞いて、小学校に対して楽しみな気持ちと期待感がうかがえる。
- ・M子の真剣な表情や応援する姿を見て、ドッジボールが好きという気持ちがあったのかな。
- ・M子は、どんな気持ちでボールを手にとったのか。
- ・M子の発した言葉にどんな思いがあったのか。声の大きさからM子の満足感を感じられる。

### 【事例4】「パス！パス！」(9月中旬)

運動会を終え、久しぶりのドッジボールに、M子も周りの子ども達もやる気が溢れていた。M子は、ドッジボールが始まると何度もジャンプをしたり、手を上げたりして楽しそうな表情だった。M子はボールを目で追い、周りの友達の様子を見ながら参加していくうちに、真剣な表情に変わっていった。チームは負けてしまい、M子はその場に座り込んだ。

次の試合の作戦会議では、保育者に「ボール、触ってみようか。」と声をかけられ、M子は静かに頷いた。ドッジボールが進んでいくと、ボールを持っていたH男から「M子ちゃん、ボールまだ投げてなかったよね。」と声をかけられ、内野にいたM子はH男からボールをもらって投げた。相手にボールは届かなかったが、M子は笑顔だった。M子は「前に行かないと、ボール取れないんだよ。」とつぶやき、前方まで移動し、手を伸ばしたり「パス！パス！」と大きな声で間に呼びかけたり、積極的にボールを取りに行こうとしていた。ドッジボールに向かう姿や表情からM子のやる気や自信を感じた。

#### 保育者の思い

- ・M子は、いつになく、ボールを良く見ながら動いているから、当たらなかったのかな。
- ・チームが負けてしまったことをM子はどう思っているのだろう。
- ・ドッジボールをする姿に積極性を感じる。ここまでやる気が出てきたのは、経験の積み重ねからなのかな。

### ◎まとめと今後の課題

M子は、ドッジボールの体験の中で、楽しい気持ちから、やってみたくて心が動いたのではないだろうか。保育者や友達に存在や気持ちを認めてもらい、共感してもらうことで自信に繋がっている。やってみたくて、やってみようという気持ちから、諦めない気持ちがM子に育ちつつあるのではないかと考える。

また、M子にとって安心できる友達の存在は大きい。その関わりを深めていく中で、周りの状況に戸惑いつつも、乗り越えていく経験を重ね、M子なりに見通しをもてるようになってきたのではないかと考える。認められる体験の積み重ねから自信を持ち、意欲的に取り組もうとする気持ちが、より一層育まれるように、10の姿から小学校へ円滑につなげていきたい。そのためには、このような具体的な子どもの姿を保育者同士で共有しながら、幼小の教職員の相互理解をより深めていきたい。



## 3 研究発表質疑

### 【事例について】

**質問：**ドッジボールを経験して、M子の最近の様子はどのように変化したのか。また、9月以降のドッジボールをする様子の変化はどうだったのか。

**回答：**表情が柔らかくなり、笑顔が増えたのが一番変わってきたところ。M子にとって安心できる友達の存在や、ドッジボールでの経験から自信が付き、自分や安心できる友達だけでなく周りの友達にも目が向くようになってきている。鬼ごっこやドッジボールなど活発に体を動かして遊ぶことを好むようになった。

運動会が終わった10月中旬からドッジボールが再開。クラス対抗のゲームから男女に分かれて、男子、女子ごとの試合を行う。男女に分かれたことで、いつもボールに触れられなかった子どもが触れたり、今まで任せき

りになっていた子ども達が自分達で何とかしようとする姿も見られた。男の子同士の対戦では、人数が少なくなったことで思い切り走りながらボールをよける姿、ボールの投げ方を工夫している姿も見られた。

M子は、男の子チーム同士の試合の迫力に驚き、「がんばれ！」と叫んで応援していた。自然に「パスパス」とボールを求める声が上がったり、「ボールちょうだい」と言いながら外野、内野にボールを回したりする姿が見られた。声や表情から子ども達の必死さ、勝ちたい気持ちが伝わってきた。

M子は、ボールを目で追い、ボールが来ないところに動いたり、友達と顔を合わせて笑い合ったりしていた。M子のチームは負けたことなく外野に残った。そばにいたH子が「M子ちゃん、次がんばろう」と声をかけると、「うん！」と、今までにない明るい声で頷き、その声から、M子の充実感と意欲につながっているように感じた。

M子がとても意欲的に活動に取り組む姿や周りの子ども達同士の積極的な姿、男女に分かれたことで見えてきた色々な子どもの場面や姿をみんなで共有することができた。

**質問：**「健康な心と体」につながる遊びに取り入れていることは何ですか。

**回答：**広い園庭で体を動かしたり、遊びの中で運動的な活動を取り入れたりしている。縄跳びや鉄棒などにも積極的に取り組み、体操教室も行っている。普段の生活の中でも意識して過ごすことで、子ども達が「やってみたくて」という気持ちが育ってきているのではないかと。

**質問：**おさがえりについて

**回答：**平成22年（創立30周年）の時から、夏休み期間中に年1回行っており、一年生や保育者も楽しみにしている行事。年長児のときに大好きだったドッジボールをみんなで楽しんだり、久しぶりに担任の先生の絵本の読み聞かせを聞く時間があったり、園で過ごしていた時のことを思い出せるような一日の流れになっている。

また、小学校についての質問やおさがえりの感想を一年生に書いてもらう時間を設けている。鉛筆の持ち方やひらがなで文章を書いている姿などから、小学校での頑張りや成長が感じられる大切な行事。



## 4 研究協議

### 【問いについて】

- ドッジボールを園でも行っている。クラスや学年で一緒に遊ぶときには、得意不得意もあると思うが、苦手な子がいるときはどのような工夫や援助をしているのか。具体的なところを小学校の先生とも話し合える機会があると、円滑な接続をしていけるのかなと思った。
- 苦手なことも、子ども達との関わりを通して、励まし合いながらできた達成感やみんなに認められた安心感につながったのではないか。運動会やドッジボールを通して、健康な心と体が育まれ、周りの子どもとか友達関係にも関わっていくのではないかと思った。
- 事例を通して、子ども達の駆け引きややりとりが難しいと思った。本園では、絵画活動を軸に教育している。子ども達は、会話をしなくても絵を通じて2～3人のグループを作り、色々な絵を共有し描きながら成長している。体を動かす遊びも参考にしたい。
- 年中からドッジボールをしている。作戦を立てたり考えたり、褒め合ったりもつとこうしたいという気持ちに繋がっていると感じた。健康な心の育ちには、友達との関係も成長にすごく大事な意味があると改めて考えた。
- 4月からリレーを行っている。最初は先生主導でチーム分けやルールを決めていた。「どうやったら勝てるか」を考えたり、自分達で準備体操をしたり、早い人が偏らないようにチームを均等に分けたり、遊びを広げたり深めたりする姿が見られるようになった。子ども同士の関わりの中で、遊びや学びが深まっていくのではないか。

子ども達自身が自ら見通しをもって遊びや生活できるようになってきているが、保育者自身も子ども達と同じように遊びの見通しをもつことが大切だと思っている。日々、子ども達一人一人に寄り添って、子どもの興味や関心のありかを捉えて、自ら考えて主体的に活動できる環境を提供できるように保育にあたっている。

小学校とは、コロナ禍でなかなか交流できないでいる。おさがえりが羨ましく思った。一人一人の育ちを共有し、子ども達を就学に向けて円滑に接続できたらと思っている。

### 〈外旭川わんわんこども園より〉

- ・おさがえりは、年長から小学校に上がる過程で先生達が心配で、夏休みの時期に毎年開催する。
- ・今年ではできる範囲で先生達と計画を立て、ドッジボールでは、クラスごとに入れ替え制にし、のびのびと活動できるようにした。
- ・小学校との年間の交流は、芋ほり交流会、学習発表会の見学、体験入学を行っており、小学校の先生と計画をもとに進めている。
- ・数年前から授業体験ということで、小学校に保育者が行き、一年生の授業を体験している。1日子ども達のそばにいて、何が育っているのか、どんなところが園と違うのかなどを見ることが出来る。授業後には、一年生の先生と子ども達の育ちについて、情報共有をしている。

## 5 指導助言

### ○公開保育、協議会を通して考えてきたこと

3年間の研究班での研究を通して、私たちは、

大切に育ててきた子どもたちのかわいい姿を、小学校の先生方に、もっともっとわかってもらいたい！

という思いを強くした。幼小連絡会では「気になる子ども」しか話題にならなかつたり、「できるーできない」ではないけれど、「できない1年生」として変に「子ども」扱いされていないかと思ったり、そして何より子どもとかかわるうえで大切にしていることや、発達過程が伝わっているのだろうかという思いがある。

その一方で、就学前教育の立場から、小学校に行き困らないように、前倒し（先取り）教育的なことをしていなかったらどうか、子どもの姿がどのように伝わっていたかどうか…そのようなことも考える必要がある。

## (1) 今日の研究発表&協議から…

### ① ドッジボールという活動を通して考える

「ルール」や「勝敗・勝負」の理解や「クラスの友達」「チームの仲間」という意識が広がり始める5歳児らしい姿が伝わった。ルールを楽しめることや、今までの5歳児の姿への憧れが、自分たちが年長になったら「やってみたい!」という意欲にもつながっていた。

だからこそ、ドッジボールが苦手な子どもや、まだまだ楽しめない子どもに対しての援助を考えることも必要である。また限られたゲームの時間で気持ちが揺らぐ子ども、例えば当てられるのが嫌という子どももいれば、「もう、やめた」「やめたい」「やりたくない」という気持ちを抱く子どももいる。そのような子どもたちを放っておくのではなく、その思いを受け止めることが大切であり、保育者がどのように受け止めるかによって、少しずつ楽しめるようになる。そして白線に興味を示す子どもや、外野をやりたい子どもなど、いろいろな楽しみ方を保障することも大切ではないだろうか。

### ② M子の姿

今までは感情をあまりださなかったM子が、「外野をやりたい」とつぶやいたことによって、友達や保育者に「意外」と受け止められつつも、ドッジボールに積極的に関わっているM子の様子が伝わってきた。現在の様子からは想像できないほど感情をあまり出さない子どもではあったようだが、今までの関わりやドッジボール以外でのM子の様子を丁寧に捉えることによって、その変化が伝わってきた。多くの保育者の方は「〇〇ちゃんと似ているな」「私も気になっていたな」「この子の～～が気になる」と、M子ではない具体的な子どもの姿も合わせながら話を聞かれていたと思う。M子の物語ではあるけれど、5歳児の今の姿として共有できる、ということでもある。そのことを保育者自身が意識し、保育を拓くカンファレンスとして共有することが、これからも保育の質を高めるためにも求められるだろう。

### ③ 園で育ってほしい姿、育てたい姿、そして伝えたい姿とは?

例えば「ドッジボールがこんなに面白く、楽しくできる」「ルールのある遊びや勝負の面白さがわかる」という子どもの姿を伝えることは大切である。

しかしそれ以上に、「できる」「わかる」ようになるまでの過程や紆余曲折、一人一人が育ってきた様子を伝えることの方がより大切ではないだろうか。そして育ってほしい「10の姿」を共有する際、生活全体を通して育まれている姿を「ドッジボール」という活動から、5歳児らしい姿を「M子」を通して、そして「10の姿」は総合的に育まれているが、共有する手がかりとして「健康な心と体」を窓口にして語っている、ということを意識しながら伝えることが、就学前教育・保育においては重要である。

## (2) 幼小の「円滑」な「接続」として考えたいこと

### ① 小学校入学に際しての不安や期待

小学校入学に際して、保護者、小学校の教師、保育者、それぞれの立場からの不安や期待がある。しかし一番考えるべきは、環境の変化に直面している子ども自身のことではないだろうか。

人生の初めて経験する環境変化に対する不安を、どのように大人が受け止めることができるのだろうか。不安があることは当然であるが、6歳の子どもが数週間で感じる環境の変化は大きい。そのことを大人が意識しながら関わるのが重要である。また知らない環境を知ることでも和らぐことも当然あるが、しかし、その年齢では難しいことや、より大切なこともある。子ども自身が不安を乗り越える（不安として受け止める）ようになる姿、環境に適応するために必要なことが何かを共有すること、そして不安や戸惑い以上に抱いている期待も大きいはずである。自分で乗り越えようとしている子どもの姿を温かく見守れる大人が、子どもにとっては必要なのではないだろうか。

### ② 「円滑」な「接続」とは

生活様式や生活形態の変化に適応できるようにすることだけが「円滑」ではない。「できるようになる」までの一人一人の子どもの姿や、行動ではなく「経験」がつながるということ、子どもを主語として語ること、このことが幼小の円滑な接続の肝、となるのではないだろうか。それは決して先取り教育をすることではなく、お互いの「違い」を知り、理解することから始まる。わからないからこそ「交流」や「連携」を通して子どもの姿を共有（知る）し、信頼関係を築くことが何よりも大切ではないだろう。

か。また一つ一つの園との関わりはもちろん大切ではあるが、就学前教育として乳幼児教育・保育で大切にしていることを発信することも必要となる。

### (3) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と発達過程の理解

#### ① 方向目標としての理解

小学校以上の教育では「到達目標」が基本ではあるが、おそらく学級経営や生活科は「方向目標」であるだろうし、そもそも一人一人の子ども理解が基本である。そういうところから、乳幼児教育・保育の「方向目標」を理解してもらうこともできるのではないだろうか。

また「保育者の思いや願い」そして「一人一人の子どもの姿」がスタートカリキュラムでどのように活かされているのか、「行動」だけでなく「心情・意欲・態度」がどのように理解されるのかということも考えていきたいものである。

#### ② 一人一人の発達過程の理解

言うまでもなく、一人一人の育ってきた過程と、一般的に言われている年齢の特徴が必ずしも一致するわけではない。しかし、育ってほしい「10の姿」のように5歳児後半に表れやすい姿はある。それはあくまでそれまでの生活や遊びの「結果」であって、必ずしもすべての子どもがそうなるわけではない。「方向目標」として考えるときに、「そうなって欲しいな」と願うことと、「そうなって欲しいけれど、今年の5歳児さんはできていないから、来年は4歳児からした方がいいかしら」と言うような、園の中で「前倒し（先取り）教育」となっていることはないだろうか。あるいは「行きつ戻りつ」する発達過程、不安が高くなったり環境が変わると、できなくなる（できなくなったようにみえてしまうこと）を「できない」と見ていないだろうか。心の葛藤や揺らぎ（子どもなりの事情も含めて）を理解しているだろうかということも改めて考える必要があるのではないだろうか。

## 6 質疑応答

**質問：**小学校の先生と情報交換会を行う際、気になる子や配慮の必要な子、「できる」「できない」という内容が主になってしまう。小学校の先生とお話しする上で分かってもらいやすい、伝わりやすい言葉があれば教えてほしい。

**回答：**気になることやできることだけではなく、子どもの姿や背景を伝えるとよい。こういうことは苦手だけれども、こういう状況だとこんな姿ですよ、などと丁寧に伝える。

**質問：**見通しをもつ力をつけるために、保育者が日ごろから大切にしておくべきことは？

**回答：**その子が自分なりに納得すること。活動の間や行動の変わり目に気持ちを立て直すこと、次はこれに向かうんだという気持ちが、見通しを持つ力としては大切ではないだろうか。

**質問：**公開保育で小学校の先生にも参加してもらった。園としては、子どもの学んでいる姿を感じていただきたかったが、自由に遊んでいる子ども達の姿を見て、小学校で45分の区切りに合わせてしっかりと切り替えができるのかな、などとマイナス面でとらえていることが感じられた。子どもの姿と一緒に語れるような機会の作り方や方法で、実際に取り組んでいる事例があれば教えてほしい。

**回答：**小学校の先生に保育を見ていただく機会があると思うが、交流や活動を通して、子ども達が遊びの中で学んでいる姿が徐々に伝わってきているのかなと感じている。学校の先生に子どもの姿の見方をお話しし、園では基本的にプラスで見ていることを伝えていきたい。

### 【公開園より】

今、目の前にいる子ども達を大切に、そして、子どもの無限の可能性を大切にする保育者、良いところをいっぱい探す保育者でありたいと、研修を通して感じる事ができた。



## 【研究発表園】 幼保連携型認定こども園 聖霊女子短期大学附属幼稚園・保育園



## 主題 「学びの連続性を考える」

～子ども理解を深め、遊びの過程から学びの芽生えや育ちをみつめる～

指導助言者 関東学院大学 教育学部こども発達学科  
准教授 三谷 大紀 先生司会者 村山 裕子 (山王幼稚園・保育園)  
記録園 土崎カトリックこども園  
和田幼稚園

## 1 主題の捉え方

子どもたちは生活の中で、周囲の環境に心動かされながら、自ら選び試し発見を繰り返し、自分の世界を広げていこうとしている。そうした体験や経験、同時多発的に起きている遊びから生まれる様々な繋がりが、子どもや園全体に伝播し遊びの幅を広げ、深い学びになっていると気づかされる。

保育者は“子どもが見ている世界を共に見つめる存在でありたい”という思いから、「子どもの姿ベース」の指導計画が、子ども理解へ繋がると考え試行錯誤しながら取り組んでいる。さらに、同僚と語り合う振り返りから、多面的な見方や考え方で“その子”や“その周辺”を捉えていくこと、経験していることをみつめていくことは、主体的な生活を支えていく保育者のまなざしとして大事だと捉えている。

明日に繋がる計画・実践の在り様を探り、家庭や園での経験や学びが繋がって成長している姿の発信工夫等により、保護者との理解・信頼を深めて共に創り出す保育に向かっていきたいと考える。

## 問 い

事例提案を聞いてここが大事だと思ったこと  
子どもってすごい！と感じた場面について

## 2 研究発表の概要

## (1) 指導計画の編成

～子ども理解を深め

明日につながる指導計画めざしたい…  
だからチャレンジ！！～

これまでも子ども理解、一人一人に寄り添った保育、そして整合性のとれた週案を心掛けているつもりではあった。しかし、教育要領が改定になったこともあり、改めて週案を見返したときに肝心の子どもの姿が見えないことに気づき、見直すことにした。子どもの姿をどう見るか、どう週案に表わしていくかなど記述の工夫やチャレンジが続いた。今年度に入り、保育者自身にとっても保育者同士にとってもより見える、理解し合える記述の枠を整理したこと

でもっと知りたい、考えたいの思いが高まった。週案はただの記録ではなく、保育者同士一緒に保育をしているのを実感しながら子どもの側にいる保育者集団でありたいと思う。

## (2) 事例提案① 満3歳児

～個の夢中に遊ぶ姿に魅了されながらも～

「目からうろこ ～保育者のまなざしがかわる！～」

入園当初から、好奇心旺盛でいろいろな遊びに興味関心が移りやすいS君。どのクラスにも自由に行き来するため、異年齢の遊びから刺激をもらえるチャンスもあった。保育者はいろいろな遊びを渡りあるく姿は、彼の良さと思っていた一方で夢中になって遊べるのだろうか、不安に思う気持ちもあった。そんなある日に園庭でS君がじょうごとペットボトルで遊んでいる姿を見つけた。身近な道具を使い自分で遊びを変化させながら、夢中になって遊んでいる姿に驚きと嬉しさを感じ、どんなことに夢中になっているのかポイントを探し、エピソード記述にまとめた。このエピソードを通して、指導助言の先生から「遊べていない場面も大事にする」「楽しめていないように見える部分で何を楽しめているのか」という新しい視点をもらいS君を見つめ直した結果、S君への理解を深めることができ、取り巻く周りの様子が見えることにつながった。今後も子どもたちが見せるいろいろな姿に保育者も同じ目線になって、一緒にワクワクしたり、悩んだりして、子どもとの生活を楽しんでいきたい。

## (3) 事例提案② 4歳児

～個の興味関心事に保育者たちも

一緒に～

「K君が動き出すまでの物語

～みんなで支える編～」

年中になり一人一人が大きくなった喜びを感じながら保育者や気の合う友だちと遊び出す中、4月から入園してきたK君は一向に遊びに向かう様子がない。何より表情がよくなく、周りの遊びに自分から入ろうとしない。保育者は興味を探ろうと会話をしたり、環境を整えたりするが、なかなか遊びは続かなかった。しかし、園庭で見つけた虫の蛹との出会いから事は動き出した。「なんの虫の蛹だろう」と見

ているK君の姿をキャッチした保育者が関わった事をきっかけに、図鑑に興味を示し、だんだん興味がカブト虫に向かっていった。K君と担任で廃材を使った虫作りが始まった。これらの出会いや支えもあり、K君がカブト虫の探求に向かい、周囲の子どたちがK君の遊びに興味を示し、遊びの輪が広がり環境の再構成へ向かっていった。さらにS君の「すごいね。作り方教えて！」の言葉が魔法のようにK君の心を開きやっとなんかK君にとって居場所の一つになれたと思う。個を丁寧に見つめること、そして面白がっていることに出会ったら、保育者も一緒に楽しみ、共に環境を創り、変化させることを恐れず試す勇気・挑戦が大事だと感じた。

#### (4) 事例提案③ 5歳児

～「おまつりやりたい！」の意欲が伝播して保育者の出番は～

「イエーイ きらきら なつ・なつまつりはじまるよ！」「おまつりやりたいね」のR君の声が周囲に伝播し、偶然にも集まっていた素材や材料を見ながら「やれそう！」と子どもたちの思いが高まっていった。担任は1学期終業間近な時、「えっ！今なの！どうして？」の戸惑いもあった。作戦会議で子どもたちの意欲に押されながら「さあ、今から！」の気持ちで保育者も準備に向かった。いざ始まるとおまつりを形にしていく難しさに出会い、自分たちなりのイメージを表現しようと何度もチャレンジする姿を見て、保育者は実現しようとするプロセスを見守っていくことを心掛けた。さらに仲間で励まし合ったり、夢中になって目的に向かったりする姿が見られ、最後に「仲間と一緒にできてうれしかった」と伝え合う姿に、試行錯誤をした先に感じる満足感や充実感を味わっていたように思えた。9つのお店のエピソードを振り返ると、子どもたちの「すごい！」に気づき、保育者は頼られることが少なくなり淋しさも感じたが、これからも一人一人の表現を大切に、それぞれが生きる保育、子どもたちと共に作る保育を目指していきたい。

#### (5) トピックス

＜保護者との共通理解を図るチャレンジへ＞

子どもの成長を理解し支え合えるように園だよりやHP以外に★貸し出し絵本に親しむ。(選べる楽しさや親子で見る嬉しさ)★遊びのイメージが広がり、自在に変化する環境の工夫(身近な素材を持ち寄り保護者・保育者で作成)★子どもの見ている世界を共に！(親子で散歩・お散歩マップ)★保護者からの情報を生かし園の遊びを身近に感じる事柄に取り組んでいる。今後も、①子どもの成長しようとする姿の発信・返信②親子での参加型の保育を工夫していく。③保育者と保護者が語り合える雰囲気作り、

場づくりを心掛けていきたい。

### 3 研究発表質疑

#### (1) 週案はいつ、どういうふうに書いているのか？

保育終了後に書くことがほとんどである。毎日の記録も書くが、その時のポイントとして見たいところをぐっと連続して書くことも多い。そのため、何日か積み重ねて書くこともある。学年によって週案のフォーマットが違うが、使用する色は統一している。赤字が予想されなかった子どもの姿・遊び、青字が保育者の援助や明日への願い、タイトルをつけることで他の保育者と読み合う際に見やすくなる。

#### (2) 他の満3歳児の子どもたちもS君の真似をしだすことはなかったか？その際にS君と同じ対応はできるのか？

S君の真似をして他の学年を探索することもある。担任一人では見切れないところがあるため、他の保育者にその場面を見てもらうこともある。

#### (3) 異年齢の交流が自由に行うことのできる環境があり素晴らしいと思った。それを実現するにあたり注意していることは？

安全はもちろんのこと、その日の各学年の活動内容と時間を毎朝ホワイトボードで把握している。ホワイトボードで確認していることで、配慮しながら行っている。

#### (4) 保育者全体の共通理解がなされていると感じた。日常的な情報交換は毎日行っているのか？具体的な様子を教えてほしい。

職員会議は週に2回行っている。1回は次週の活動を確認したり、週案を見ながら子どもたちの様子を伝え合う。もう1回は事務の先生や給食の先生も伝達があったりするので、ほぼ全員の職員が参加している。全体会議は30分くらい、子どもの姿を伝え合う会議はその時によってまちまちだが1時間くらいである。

#### (5) 5歳児の作戦会議をもう少し詳しく教えてほしい。

担任が子どもの思いを知りたかった。夏のおまつりのイメージはどんなのがあるかな？と意見を出し合った。また、子どもたちも友だちの思いを聞く機会にもなると感じ作戦会議①を行った。その後の作戦会議②では、可視化したものを子どもたちが見ながら、自分たちでやりたいものを思い思いに決めていった。友だちと一緒にいいという子どももいれば、お店に対しての思い入れがある子どもも見えてきた。作戦会議③では子どもたちに紙を渡し、必要なもの

を書いてもらった。担任が思っていたよりもイメージが出てきているのを感じた。

#### 4 研究協議 〈指導者先生と仁村先生との対談形式〉

**指導者：**5人の発表を聞いてどうだったか。

**発表園園長：**すごいと思う。どんどん先生たちが自分ごとにしていったことがすごい。先生たちがそれぞれのいろんなことを抱えながら子どもと関わっていた。「学びの連続性」というテーマを見て、簡単じゃないと感じた。子ども理解の窓口から入り込んでみようと思った。その結果、自分のクラスの子ども、聖霊みんなの子どもを見て目が広がって、すごい成長となった。

**指導者：**それぞれの先生が自分ごとにするということを詳しく話をしてほしい。

**発表園園長：**先生たちは子どもと向き合う時に課題を自分で持っている。自分とはこうなのだと園内研修で話していく。子どもと一緒にいるということは自分自身の写しになるという気持ちを開いてくれて嬉しかった。そして、それぞれ先生の違うところを感じると思う。でも、あなたはあなたでいいと子どもたちに言うように、先生たちも同じだと思う。先ほど先生が「自由につかっていいよ」を拾ってくれてとても嬉しかった。先生含め私にとってはどうやって子どもたちと向き合ったり寄り添ったりしたいのかを彼女たちに考えてもらった。

**指導者：**自分ごととして捉えているときにこのように寄り添いたいけれど、それができないというそれぞれの課題を話し合っているとあったが、自分がこうなのだとマイナスの部分を出せることは簡単な事ではない気がする。その風土はどのように作っていつているのか。

**発表園園長：**風土や雰囲気を作ることは本当に簡単なことではない。だからみんなが集まってできることでもない。ささやかな時間で気持ちを吐露してくれたところで何かに繋げるくらいだと思う。難しいことで、先生によって違うことは当たり前だと思う。それでも子どもの思いに寄り添うという掲げたテーマでやってみようという思いでいる。結果、簡単ではない。

**指導者：**ルール化はしていなくても子どものことを話し合うときの大前提にしていることについて話をすることはあるのか。

**発表園園長：**子どもの今。キャリアが出てきている

先生たちがなんとなく自分の物差しになってしまうことがある。でも、今の子どもたちがどうであるかということ。例えば、行事や活動にしても練り直し、すりこみするときにそこに気を付けてやっていると話している。今出合っている子どもたちと向き合っていて、今日の子どもたちはどうだったか、明日どうなるかなどを考えていくようにしたい。

**指導者：**経験が豊かになればなっていくほど参照できるものが人間は増えていく。あの時がこうだったからこれでいこうということに陥ると実は目の前の子どもたちの声を聞いていないのではないのかということか。

**発表園園長：**はい。そこは私たちが試されているところだと思う。自分でトライ、チャレンジをするしかない。自分をどう開いていくかということが大切である。

**指導者：**先ほど出た物差しというのはある意味自分の見る枠組みである。それを否定するべきものでもないとは最近思う。なぜかというとその人の味となるからだ。だけど、一方で自分の物差しからだけ見えない世界もあるのだ。例えば自分の物差しから言えば遊べていないという風に一旦みると意外と大事なことだと思う。人それぞれ物差しが違う中で自分はこう見えるが、じゃあ待てよと考えることができる。自分を見つめ直すようなことが大事だと思う。

**発表園園長：**今回はそれぞれがそこで止まらずに問い直してみることで、ふりなおしてみたり、週案をもう一度見直してみたりするちょっとの余裕が見え隠れしてきた。毎日迷走しているのは確かだが、子どもの姿、また違う局面から追ってみることをしているいろんな情報ももらい、予想外なこともある。だから、やっぱり自分の物差しプラス、せっかくの仲間の物差しを大切にしたいと思う。

**指導者：**自分の物差しでこだわろうとしてしまうときは、先生に余裕がない時である。とにかく保育を回さなきゃいけない、目の前の子どもを変えなくてはいけない時は howto 的にやる時もある。自分の物差しと違う物差しで比べることができるのは先生たちにゆとりがないとできない。今日の実践提案を見ると先生たちはすごく忙しいのではないか。燃え尽きてしまわないか？

**発表園園長：**忙しい。本人たちの自分ごとにならしているところがある。副園長などが自分の立ち位置として必要な動きにどんどん入っていつてくれるため、先生たちが今子どもとこうしたいのだなと受け取ってくれている周りの先生がいることに気付いて

ほしい。廊下の遊びなどは一緒に入って、子どもとのかかわりを通してここが子どもの寄り道の場所になっていて面白いと思う。そういう立ち位置でフリーの先生たちがいることも幸せなことだと思うし、こういう駒を使ってくれたら嬉しい。

**指導者：**さっきの事例を見ていたのは発表園園長先生だ。

**発表園園長：**そのエピソードは武勇伝のたくさんあるT男を受け取るか。担任や先生たちは彼が何か変わってきているとキャッチしていた。不器用なところもあって牛乳パックを切ってもギザギザだった。周りは金魚を作っているが、T男が何もしていないと思いきや「金魚の入る物が必要だよ」「いいこと思いついたんだ」と牛乳パックをくるんと巻いて底がない状態で「これぐらいだと思わない？」と言っていた。彼の発見をしたような姿を見ると「そうだね」と言うしかなかった。しかし、あえなく豆腐の入れ物に変わっていた。どんなことがあってそれに行き着いたかはわからないが、担任は何かを感じていたと思う。

**指導者：**子どもは嬉しいことがあると独り占めしようとしな。そういう子どもらしさを持っている職員の集団に感じた。自分の見取った子どもの姿をおすわけしたいように感じる。それを喜んで聞いてくれるであろう安心できる環境があるから話せるのではないか。その文化がとても素敵だと思う。

**発表園園長：**一緒に大きくなるということをポイントにしてやってきた。みんなでいろんなもちやもちやに出会い、大事なもちやもちやを大事に整理したいとかではなく、一緒に浸っていききたい。今回指導者の先生がそれを面白がって見てくれたことが非常に学びとなったのは確かだ。

**指導者：**指導計画の変遷を試行錯誤してどうやら子ども、先生たちの思いを仲間と共有できるかを繰り返し行っていくことが保育の質の向上につながるということがわかっている。

## 5 指導助言〈三谷先生より〉

まず、「学びの連続性」というテーマに引っかかった。分かったようで分からないというかまだ考えている最中である。「学び」という言葉と「連続性」という言葉、そのふたつの言葉をとらえなおしておこうと思った。

「学び」という言葉を似た言葉に置き換えると「勉強」になると考えた。勉強するということは、教え

に従って身につけるべきことを身につけること。勉強は、学ぶことを想定して上手に先取りする姿が良いとされる。一方、「学び」と言った場合は、自分になりたいと思う自分になること。つまり自分が本当に大事だと思うことを自分で楽しんだり苦しんだりしながら探求していくことが学びだと思う。

「連続性」という言葉からイメージするのは0歳から5歳と連続することや保幼小の学びの接続などのこと。また、かつて経験したことを新たな場面で活用していくということを目指しているのか…など色んなことを考えた。しかし、自分からこうありたい自分になるっていうことを学びだとするならば、自分からこうありたい自分し続けようとしていけることが「学びの連続性」と思っている。まだ、仮の考えであるが。

結論を申し上げますと、今回のテーマで子どもが学んでいる姿はたくさんあったが、僕が印象的に思ったのは「園の先生方」だった。今の子どもの姿を大事にしたい。と対談の中でもあった。子どもの興味関心から、遊びを展開したい。仲間と共に、子どもの姿を味わいたい。そして保護者と共に子どもの育ちを支えていきたい。ということがあった。それが学びであり、自分になりたいと思う自分になることを続けているさまが描かれていたように思っている。

少なくとも理解できたこと、むしろすごいと思ったことは園の先生方の子どもたちにむける「まなざし」がとても温かく二人称的に関わっていることだ。それについて話していきたい。

まず二人称的関わりについて詳しく説明していく。参考文献参照。他の人間と関わる時は、一人称的、二人称的、三人称的と関わっている。昔の心理学では、赤ちゃんを物として捉えたり、他者としたりして考える、三人称的関わりがされていたようだ。その子どもと個人的に関わりをしようとするのが二人称的関わりである。

その子が何を面白がるかということをお大事にしていくべき。人間は、教えたがったり教えられたがったりすることが好きと研究でも言われている。でもその教え主義にはまると、何を考えても保育者としてどうすべきかと考えて今の子どもの声を聞かずに今はこうすべきというのを押し付けてしまうことが起きてしまう。

そのため、子どもの世界に入り込んでいくときには、その子の側から見ていくことになる。だから、喜怒哀楽が見えてくるし感じられるのだと思う。今日の事例でもそうであったようにすぐに見えたり感

じられたりできることではないが、何か思いがあると信じ丁寧に優しく関わっていると感じた。また、子どもが探求していたことを先生方も探求して子ども小さな発見にも目を向け、時間や空間的周辺にも目を向けているとも感じた。どんな場だったかということも見えていて、素晴らしいと感じた。

次に副題について考えると、「ない」ではなく「ある」から始まる保育と感じる。落ち着きが「ない」と感じた子どもにもなにか思いが「ある」のではないかと考えていくことが子ども理解。その子たちが感じる思いを一緒に感じる、共に感じる事が大切。

今回のどの事例も子どもたちの身近な物を使って、楽しんで遊び込んでいく姿があった。4、5歳児の工夫というものが周りに広がっていくことがあった。そしていろんな問いが生まれていた。子どもたちにとってどうか、問う姿勢を大事にしているのかと感じた。予想外のことが起きても、計画通りに進めようとしているのではなく、子どもたちが見せてくれる姿を大事にしていると思った。指導計画の話も出していたが、保育を可視化する姿もみえていた。それについても詳しく話す。

どう書くべきか決まっていなかったり、後から付箋等で追加したり、記録することが第一の目的ではないようで、子どもの姿についての会話や同僚との対話を促進するツールとなっていると感じた。評価する記録ではなく、子どもの姿や自分たちの保育を多面的に見るような週日案の書き方に変わってきていると感じる。また聖霊は、鑑識眼に基づく評価でなされていると感じている。その評価と言うのは、園内での評価基準や子どもたちの姿から判断される。評価基準が固定されていない、対象多面的にみること。結果として、自分自身の行為の結果に対しての省察が土台としてある。当初の想定と違ったり、裏切られたりすることもあるが、そのような新しい見方があると評価の基準を発見していくべきである。

そして子どもたちが夢中になっていることを可視化させることで、保護者達も園のファンになっていたり、園での育ちを伝えることができたりサポートしてもらうことができる。子どもに向けての可視化もたくさんあった。虫コーナーがあったり、相談した内容を書いたり自分たちで何が必要か書き出したりしていた。魚屋さんや楽器屋さんが盛り上がっていたら…ディスプレイしてみるなど。

今回の週案は、まさに保育の可視化。相談したり会話が広がったりしていると思う。それ以外には、ドキュメンテーションをも、基に振り返る。また、「エマージェント・カリキュラム」というのも良い。特定の子どもが遊べていなかったと感じた時、どんな

ことが好きかどんな遊びをしていたか、みんなで話し合っって書き出してみる。すると、見えていなかっただけで結構遊び込めていたことに気がつくことができ、新たな環境を構成することができた。可視化によって生まれてくるものは「対話」である。保護者にとっては園で子どもが経験していることが見え、園への理解が深まったり、家庭と園での遊びが循環していったりする。遊び込んでいるときは同時多発的に色々な遊びが起きている。

そして今回のカブトムシの事例がとても面白く、心にしみた。彼がし始めたことに「何それ？」と遊びが広がっていくし、コーナーを廊下を作ることによってまた異年齢のかかわりが生まれやすくなる。何かやっていることを「見える化」していくことによって、良さの発見に繋がっていくと思った。また、保育者にとってみると、一人ひとりの子どもの声により丁寧に耳を傾けるようになっていくと思う。

実践提案であったように、同僚との対話、自己内対話にも繋がる。そのようなことが生まれてくるのが大事だと思う。子どもが遊び込む姿が生まれるには、保育者の子ども理解と工夫が必要だ。その子が自由に選んで決めることができる時間・空間・ものが必要であり、そのためには温かい眼差しが大事である。子どもに寄り添う、子ども理解を深めるには、目の前の子を受容して、応答的・肯定的に関わっていくことだと思う。子どもの世界を理解し、感じることも大事である。盲目的に何が何でもありということではない。その子なりに理があるということを見取り、子どもの探求を探求したり、一緒に遊び込んだりする。最終的に子どもから学ぼうとする。子どもを人間として見る。子どもが教えてくれることがいっぱいあるということを知ることが大切である。今ある姿を変えようと操作しようとしがちだが、子どもの言い分も聞き、受け止めていき、提案もするべき。

子どもが見ている世界を見ることは、簡単ではない。話題に上がったように、同僚との対話が大事。子どもと丁寧に関わるには、どうかかわるべきかと話すのではなく、なにが起きているのかということをし話し、明日に繋げる。そして子どもと対話し、同僚とも対話してみる。それを基に自分自身で対話してみることも大事であり、明日の保育の原動力にしていく。

学びの連続性を聖霊の先生方にも感じた。小さな一歩を踏み出しながら、子どもと仲間と作り上げる保育を目指したらよいのではないかなと思う。よりよくしていこうと思っていくプロセスにこそ保育の質を高めていくヒントがあるのではないかなと思っている。

## 【研究発表園】

## 幼保連携型認定こども園 あさひかわこども園



主題 「園内研修の質を高める」  
～一人一人に寄り添った保育をめざして～

指導助言者 柴田学園大学  
短期大学部

学長 島内 智秋 先生

司会者 八柳 千秋 (あさひかわこども園)  
記録園 秋田太陽幼稚園・ベビー園

## 1 主題の捉え方

本園では「体づくり」「心づくり」「考える力づくり」を中心とした《生きる力の基礎》を培う保育を目指し、園内研修を通して子どもの育ちを捉え、生きる力の基礎を培うためにどのような保育が必要かを探求し続けてきた。園内研修と保育の実践を繰り返す中で、見えてきた課題を園内研修で取り上げるという積み重ねが、子どものよりよい育ちに必要不可欠だと改めて確認できた。これまで、保育の質向上を目指し様々な園内研修の方法に取り組んできたが、その中で子どもや保育者の姿を様々な視点から捉えることのできる、公開保育での学びの深さや重要性に目を向けた。園内での公開保育を実施するにあたり、「子どもの姿や課題を捉える」「問いをつくる」などステップを踏んで公開保育へと向かう、独自の研修システム『ASECE』を用いることで、同僚性や保育者一人一人の保育力、そして園全体の保育の質を高めることができると考えた。『ASECE』を実施する中でこれまで抱えてきた課題がより浮き彫りになった。研究発表を通して、質のよい園内研修をめざすための糸口を分科会参加者とともに探りたい。

## 問 い

- 1 時間や参加人数が限られている中、一人一人が参画意識をしっかりと持って研修を行うために、どのような工夫が必要か。
- 2 研修に参加できない保育者がいる場合、どのように伝達・情報共有を行えばよいか。

## 2 研究発表の概要

## (1) 研修・研究のこれまで

## ○エピソード記録を使った研修

## 〈成果〉

- ・子どもの内面や育ちを多面的に捉えることができる。
- ・様々な保育観に触れ、援助や環境構成を学ぶことができる。

## 〈課題〉

- ・年齢によって子どもの姿をエピソード化することが難しい。
- ・書類作成の負担を軽減するため、クラウド管理の簡略化された週日案を使用していた。そのため週日案を上手く活用することができずエピソードを書きためることが難しい。
- ・シフト制になり、全員で集まることから、学年単位で写真を活用した研修を行うことにした。

## ○写真をを使った研修

## 〈成果〉

- ・目の前の子どもの姿・育ちを捉え、より具体的な援助を考えることができる。
- ・学年の保育の方向性や子どもの育ちに必要な関わりについて共有できる。

## 〈課題〉

- ・長時間保育の子どもの増加により、シフト制になったため、同学年の保育者間で必要な情報共有ができない。このような背景から、学年の状況に合わせてテーマを設け、協議、研修を行うスタイルを取り入れた。

○テーマを各学年に任せた研修「保育の語り合い」  
毎月一度各学年で決めたテーマのもと、研修

を行い、保育者一人一人の保育観の違いを認め合い同僚性を高め、連携を図りながら保育に努めていくことを目指して現在実施している研修。

研修内容の具体例として、気になる子どもについてのカンファレンス、行事への向かい方について、行事後の子どもの育ちや保育の協議、子どもの育ちや姿を出し合い、今後、どのように保育を行っていくかを写真から具体的に考えるという内容を行った。いずれの研修も、「子どもを中心に」という意識で研修を重ねてきた。テーマがそれぞれ違うため、研修記録用紙を統一し、閲覧しやすいように工夫をした。また、短い研修時間でも保育を振り返り、次の保育へと繋げていくことができるよう、評価や保育で大事にしたことの欄を設けた。これにより園内研修に参加していない保育者も、他学年の保育で大切にしていることや課題、年齢による育ちの違いや願いが一目でわかるようになった。

#### 〈課題〉

- ・紙面だけでは子どもの姿や保育の実態を共有できない。
- ・他の保育者から学び、自身の保育力に繋がる研修にならないため、公開保育を実施することになった。

#### (2) A S E C E の実施

A S E C E は本園独自の園内研修システムで S T E P 1 事前研修、S T E P 2 子どもの姿を捉える、S T E P 3 問いづくり、S T E P 4 公開保育、S T E P 5 振り返りから、構成されている。

##### 〈STEP 1 事前研修〉

各学年での研修を通して子どもたちの育ちを捉え、保育の振り返りや見直しを継続して取り組んできた。年度末に1年を通した子どもたちの育ちや保育について各学年で田の字ワークの研修を行い、振り返る。

##### 〈STEP 2 子どもの姿を捉える〉

S T E P 1 で使用した田の字ワークの資料を活用し、新しい学年でスタートを迎えた子どもたちの育ちや課題、保育者の願いや必要な援助を捉える。

##### 〈STEP 3 問いづくり〉

S T E P 2 の資料を見ながら子どもたちの課題や必要な援助、環境構成を捉え直し、公開保育へ向けて問いづくりを行う。

##### 〈STEP 4 公開保育〉

公開保育を通して子どもの育ちだけでなく、課題や保育者の悩みなどを共有する。

##### 〈STEP 5 振り返り〉

問いに対する付箋をもとに協議を行い、今後の保育の在り方について導き出す。

##### 〈成果〉

- ・S T E P を踏んでいくことで、研修と保育のつながりを実感できる。
- ・P D C A サイクルが明確になる見通しを持った保育ができるようになってきた。
- ・子どもや保育の実態、大切にしていることが見えるようになってきた。
- ・S T E P 5 までを繰り返す中で保育の実践力向上を感じる保育場面が増えてきた。

##### 〈課題〉

- ・S T E P 4 から他学年の保育者が参加するため、これまでの経緯や遊びの意図を伝えることが中心となり、より深い協議ができず、学年を超えた連携が十分にできない。

#### (3) A S E C E を通して気付いたこと

- ・何をねらって研修するのかを明確化し、「ねらい」を意識して参加する。
- ・これまでどのように研修や保育が行われていたのか、学ぶ意識を持って臨む。

#### (4) A S E C E を終えて

深い協議ができなかったため、もう一度年長組の保育者で話し合いを行った。付箋の中から子どもたち自身に必要なものに気付き、自分たちで遊びを作っていくためにはどのようにしたらよいかを話し合った。また、公開保育の日、数人が始めた小麦粉遊びから“数人だけではもったいないのではないか”という話し合いになり、その結果クラス活動として感触遊びを取り入れ、一人一人が実際に経験することで“やってみたい”“自分たちで”に繋がるのではないかと考えた。感触遊びの経験から、友達と協力して作る喜びを感じて遊びが広がっていった。

#### (5) 終わりに

研修、実践を重ねることで得られる気付きを大切にしながらA S E C E を更新していき、よりよい保育につなげていきたい。

また、保育者一人一人が自分の保育力の向上や保

育の質の向上、そして何よりも子どもたちの育ちのために必要不可欠なものであると捉え、研修という学びの機会を大切に子どもたち一人一人に寄り添った保育を目指していきたい。

### 3 研究発表質疑

#### ①秋田県 にいだこども園

Q 公開保育後の事後研修をどのように行っているか。

A 公開保育を午前中に行い、その後の事後研修は未満児は午睡中に以上児は学年毎の話し合いのため、午睡の見守りやバスの添乗を他学年と代わって各学年で研修ができるようにしている。

#### ②秋田県 にいだこども園

Q 未満児の公開保育を行っているのか。もし行っているのであればどのような形で行っているのか。

A 未満児の公開保育は実施していない。公開保育を行って午後の協議が今の状況では難しい。今後行っていきたい。

### 4 研究協議

#### 〈問い1について〉

#### 青森県 星美幼稚園

午前中に公開保育を行い、午後に協議会を行っている。各クラスから一人は出られるように合同保育にしている。付箋を使っているが、発言できる保育者と発言できない保育者に分かれてしまうので何かよい方法はないか考えている。

#### 島内先生より

ベテランの保育者ほど発言が少ない保育者に、頑張ってもらいたいと思うのは、その保育者に対して愛情があり、育ちを期待しているからだと思う。発言することには性格的なものもあるが、難しいようであれば付箋を用いて、書いたものを回していき、それを取り上げたりすることから始めてみる、自由度の低い質問の時に答えてもらう方法がある。質問にも2つのパターンがあり、答えが限定されるクローズドクエスチョンと自由度が高いオープンクエスチョンがある。そのような小さな取り組みから始めていき、その保育者が何か発信

した時にはどんなことでも承認していく。いろいろな保育者が認めてくれたという安心感から更に引き出していけるのではないかと思う。きっと、その保育者も光るものを持っていると思うので、その時を楽しみに待ちながら、いろいろな方向で行ってみてはどうか。

#### 福島県 ふくしまわかば幼稚園

参加人数や時間が限られた中での研修のため、事前に議題を周知したりプリントを作って議題の内容を分かりやすくしたりし、各自議題についてしっかり考えた上で参加する、始まりと終わりの時間を決めて時間を守って行っている。

#### 〈問い2について〉

#### 秋田県 御所野幼稚園

保育者ができるだけ参加できるように午後の時間に設定している。

協議の際に使った模造紙を使い、参加できない保育者には、参加した保育者が後日説明をしながら必ず協議の内容を伝えている。

公開保育を行う時は事前資料を配布し、資料を見るとクラスの様子や見てもらいたいポイントが分かるような資料作りを心掛けている。

#### 秋田県 手形山幼稚園

付箋を使い、紙面にまとめて情報を共有している。公開保育の様子をビデオ撮影し、時間がある時に見るようにし、感想などを伝え合う機会を大切にしている。また、研修の問いを明確化することを大事にしている。問いを考えることも学びとなるので、“どういう所をみてほしいのか”“どういう所を研修したいのか”を皆で共有しながら限られた時間を大事に使いたいと思っている。

#### 秋田県 秋田太陽幼稚園・ベビー園

未満児の公開保育を行っている。午睡の時間を利用するなど、多くの職員が参加できる時間を選んで話し合いを行っている。

### 5 指導助言〈島内先生〉

#### (1)園内研修の意味

#### ○園内研修と目的

- ・テーマを決めて、目的を絞ってなどねらいを持って行う。

- ・園の課題やよさと出会って、子どもにとっていい保育環境をつくりだすことを願って行う研修。
- ・課題をなおすためのトレーニングのような、きつい苦しいものではなく、よさを認め合って保育のやりがいの共有からチームでの保育の「おもしろさ」「奥深さ」に出会い、保育をもっと好きになるよさが園内研修にある。

(2) 園内研修アンケートより現状報告とこれからに向けてよかったことや実施内容の質問

### ①秋田県 認定こども園 こひつじ

月1回以上児、未満児の保育者が一緒に4～5人グループで30分話し合いを行っている。思っていること、感じていることがたくさんあることを知れた。共感できる嬉しさがある。

Q何についての話し合いか。具体的に教えて下さい。

A“共に喜んで”というテーマで園内研修を行っている。その中で“信頼関係”というキーワードが出てきたので、そのことに視点を置いて話し合いを行っている。

### ②秋田県 上宮第二幼稚園

全体的な計画や各指導計画についてマネジメントをする

Qどのようなマネジメントを行っているのか具体的に教えて下さい。

A園内研修で得たことをPDCAサイクルを回して指導計画に還元している。

一人の保育者が一人の指導計画を見るのではなく、園内研修の中で様々な視点で話し合っ指導計画を立案している。

### 島内先生より

保育者一人の保育観はどうしても決まっているため皆で話し合いを行っているのはとてもよいと思う。

園内研修に参加できない保育者へはどのようにしたらよいかということが話題になっているが、例えば、この保育者に身に付けてほしいと願う保育者に伝える役目をしてもらう。伝えることで反復し身に付いていく。

「見ておいてね。」ではなく、学びが定着していく

ため、誰かが伝えるという方法を用いてはどうか。

(3) 自分の園に合った園内研修を探る

- ・管理職も教員も研修の必要性を感じている場合  
→園内に研修担当を設けて管理職と相談し計画する。

- ・管理職のみが感じている場合  
→園全体を俯瞰して必要な学びを計画していくことも(その中でも、学年に1つはテーマを割り振るなど)

- ・教員のみが感じている場合  
→教員で各学年に担当をおき、本当に必要な学びを計画し他学年と連携し計画する。

- ・どちらも必要ないと感じている場合  
→他園の公開保育で必要性を知る。

園内、園外の研修について職員から十分なヒアリングを行うことで学びたい気持ちのモチベーションを高めていくことにつながっていくと思う。

- ・園の教員構成・園の保育内容によって必要な研修が違う。

H市における「保育環境調査」より

どのような研修をやってほしいのかという問いに対して、経験年数の若い保育者ほど実践の研修を希望し、ベテランの保育者ほど発達に特徴がある子についてなどの研修や、園全体を見渡した時に園にとって必要と思われる研修を希望していた。担任は明日の保育に直接活かせるものを望み、ミドルリーダー以上は、今の園の状況と照らし合わせて不足を補う研修を望んでいた。

(4) 園の取組で効果があったところから報告

### ①青森県 呉竹幼稚園

学期に2回の園内研修、他の教諭の指導の仕方をみて、いろいろな意見を言い合うなどして参考にし、保育者の資質向上を図ることができた。

Q具体的にどうした場面に成長を感じましたか。

A公開保育を行い、指導の仕方や環境設定を参考に今後保育に努めていくことができた。具体的には、子どもたちの創作意欲が高まるためにどのような準備が必要かを学んだ。

### ②秋田県 宮の杜神明こども園

月に2回SOAPの視点をを用いることで話し合いの流れが分かりやすくなると共に前向きな話がで

きるようになった。

Q具体的に教えて下さい。

A午後の協議の際、SOAPの視点で行っている。主観的な情報（子どもたちの様子）を踏まえて客観的な情報（子どもたちがどのような面白さを感じていたかなど）をまとめる。評価ということで“どのような成長につながりそうか”など意見を出してもらい、最終的にはねらいに沿った計画や環境設定をどのようにしていけば担任の願いや思いが結び付くかを付箋に書く。

### ③秋田県 湯沢若草幼稚園

学期毎に園内研修を行っている。職員一人一人が自分の保育を見つめなおすことができる。ワークショップ型研修では経験年数を問わず、一人一人が自分の思いや意見を活発に出し合うことができる。

Q特に変化を感じたところはどのようなことを行ったからだと思えますか。

A2, 3歳グループと4, 5歳グループに分かれて行うことで経験年数が浅い保育者も意見が出しやすい。その後全体で共通理解を図っている。マイナスな意見は、“私だったらこうするな”という意味も込められているので、“次はこうしてみよう”と前向きな考えに結び付く。

### ④宮城県 矢本はなぶさ幼稚園

年2回園内研修を行っている。教師間で研修内容を統一できるよう話し合いを重ねることで少しずつ共通理解ができるようになった。子どもの成長が見られるようになってきている。

Qどのような会話から教員が子どもの成長を見取れるようになったと感じましたか。

Aこれまでなかなか自分の意見が出せなかった子どもが出せるようになった姿を共有した。教師間で付箋を使って様々な気付きなどの共通理解ができるようになってきていると感じている。互いに気付けなかった小さな発見なども経験年数にかかわらずに見える化したことで更に気付けるようになった。

○園内研修として取り組みやすい保育事例を語る

- ・園で同僚性を持って語る関係づくりがこれからの園の場合は、自分の事例の良かったことを伝え合い、保育の中で自身の頑張りをみとめてくれる環境と知り、安心してなんでも語り、相談できる関係性がつくりやすい。
- ・すでに日頃から語り合いや相談ができていた園の場合は、失敗した事例や悩んでいる事例をあえて出してもらい、共感や助言、一緒に考えるようにしている。いいことも悪いことも何でも話し合える勤めやすい風通しのいい環境で、長く保育を続けてほしいと考えている。

その後、学びを活かした保育をしたことによって子どもがどう変化したのか、保育者がどう変化したのか成長を語り合えるようにしている。

○園内研修を通して園としてどこを目指すのか

- ・園の保育の質向上
- ・教員の保育力アップ、子どもへの関わりや子どもの見取りが深まる。
- ・園内のコミュニケーションの円滑化
- ・だれでも語れ、一人一人を認め合う園の雰囲気
- ・保育のやりがいや楽しさを実感できる。
- ・自分の成長を園内研修などの記録で振り返って実感でき、後輩の成長の導き方がわかり要点で助言できるようになっていく。
- ・そうした教員に実習生などの若い世代が憧れ、保育職を目指す人材が増える。
- ・園内研修は、この一つ一つを創り出していくことができる。

○園内研修は園を自分たちで創る

記録や内容について近くの保育者養成校の教員の研究と繋がり、様々な方法で検証することと一緒にすることでヒントを得ながらも、最終的には園をどうやってよくしたらいいのかを考えて、自分たちで本気でやりきる覚悟を持つことが必要である。今日よりも明日、そしてその先も成長し続けようとするプロフェッショナルな保育者集団であり続けるために、園内研修を自分たちの園に合った方法を模索しながら、成長し続けてほしい。



主題 **保育の計画と実践と評価**  
 幼児教育の最新情報と保育実践

(一財) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構  
 専務理事 加藤 篤彦 先生

司会者・記録員  
 中村 滋 (高清水幼稚園)

○無償化の二つの柱

- ①幼児教育への公的資金の投入 → 幼稚園教育要領を理解した上での実施
- ②就労支援 → 各基礎自治体での行政対応
- ◎巨額の公費投入＝幼児教育の価値が認められた→公的支援に見合った質の高い幼児教育の提供・幼児教育の質の向上を図る社会的責任

○幼児教育の効果 1. 認知 2. やる気・意欲 (上昇意欲) 3. 根性・忍耐

「社会に開かれた教育課程」自己評価の方法・意義→自園の主體的取り組みの成果の公表これからの社会の変化への対応

「教師だけが一方的に教えるような教育活動から、多様な選択肢の中で、自分自身の答えを生徒が自ら見出すことができるような学習が中心となる場への転換」

○持続可能な社会の担い手を育てるために

多様性・相互性 (かかわりあう)・有限性 (かぎりある)・公平性 (一人一人を大切に)・連携性 (力を合わせる)・責任性 (責任をもって取り組む)

◎親・先生の言う通りやるだけの子どもが、自分に責任をもって生きる人間に育つか。

幼児期は指示・命令で育つものでなく、環境を通じた教育で育つ。

○幼児への保育も教職員集団も同様に

- ・自分が人と違って大事にされること
- ・多様性の尊重・緩やかな関係・良さを見つける・受け止める度量

○現代という答えのない時代を生きる子ども達 どのような力を育成する必要があるのか

- ・日常の中で課題を自分で見つけること
- ・自分で考え、それをやり遂げること → やり遂げたときに育っている力
- ・何を教えたから→子どもが何を学んだか、何を学んでいるのか 探求志向への転換  
 探求志向は、モチベーション・意欲・忍耐などの心の動きが重要

◇自ら目標を持ち、工夫しながら、強い意志をもって、それを達成しようとするのが学びに向かう力の獲得 (教師の支援: どうすればいいんだろうね・不思議だね)

**グループ協議** 「今日の講義で自分の保育に重要だと思ったことをキーワードを3つあげ、順位をつける。  
 そのことについて情報交換」

【話し合われたキーワード】

- ・問題解決の力 ・職員間の連携 ・保護者への発信 ・全体の見守り
- ・子ども一人一人を大切に ・多様性を受け止める
- ・主体的な学び ・学びに向かう力
- ・「自分のものは自分のもの」から「共有の場面」を大切に
- ・相談しあえるチーム ・答えのない保育

# 大会役員

## 【東北地区会運営委員会委員】

山形県	千葉 亮子	幼保連携型認定こども園尾花沢幼稚園
	三吉 博史	認定こども園ゆりかご幼稚園
	金沢 友治	認定こども園金沢幼稚園
福島県	平栗 裕治	みどり幼稚園
	細谷 實	みその幼稚園
	阿部 光浩	認定こども園こはらだ幼稚園
宮城県	鎌田 文恵	茂庭幼稚園
	根来 興宣	多賀城高崎幼稚園
	庄司 昭博	ねのしろいし幼稚園
岩手県	坂本 洋	幼保連携型認定こども園盛岡幼稚園
	坂水 かよ	聖パウロ幼稚園
	今西 界雄	ふたば認定こども園双葉幼稚園
青森県	山西 幸子	八戸学院聖アンナ幼稚園
	棟方 重幸	愛育幼稚園
	澤田 威	認定こども園富士幼稚園
秋田県	武田 正廣	さかき幼稚園
	渡辺 丈夫	幼保連携型認定こども園こまどり幼稚園・保育園
	伊藤 敬二	認定こども園土崎幼稚園

## 【秋田県私立幼稚園・認定こども園連合会実行委員会】

大会会長	武田 正廣（さかき幼稚園）		
実行委員長	渡辺 丈夫（こまどり幼稚園・保育園）		
実行委員			
総務部	加藤 敏（秋田太陽幼稚園・ベビー園）	石川 勲（にいだこども園）	
	藤原 はるみ（勝平幼稚園 ひよこ保育園）	村上文子（外旭川わんわんこども園）	
渉外部	武田 正廣（さかき幼稚園）	岸 豊（双葉幼稚園）	
	淳城 聖子（淳城幼稚園・ていじょう保育園）	日景 陽司（向陽こども園）	
	大城 敬子（若草幼稚園・保育園）	佐藤 聡太郎（ルーテル愛児幼稚園）	
研究部	伊藤 敬二（土崎幼稚園）	仁村 由美子（聖霊女子短期大学付属幼稚園・保育園）	
	淳城 聖子（淳城幼稚園・ていじょう保育園）	月居 裕二（扇田こども園）	
	中村 滋（高清水幼稚園）	平塚 和博（御所野幼稚園）	
	北谷 尚美（あさひかわこども園）	小松 純子（こまどり幼稚園・保育園）	
	伊藤 美鈴（にいだこども園）	長谷川 恵（四ツ小屋）	
運営部			
	岸 豊（双葉幼稚園）	藤原 はるみ（勝平幼稚園 ひよこ保育園）	
	月居 裕二（扇田こども園）	中川 英明（愛宕幼稚園）	
	日景 陽司（向陽こども園）	佐藤 聡太郎（ルーテル愛児幼稚園）	
	伊藤 昇（秋田東幼稚園）	渡辺 真知子（四ツ小屋）	
大会事務局	渡辺 丈夫	加藤 敏	石川 勲 野中 真由子

## 編集後記

新型コロナウイルス感染症の流行により昨年は延期となり、今年に入ってから更に首都圏等で緊急事態宣言が3回も出されるほど感染者が急増し東北地方でも脅威に晒されました。そこで、県内外の皆さんからご理解をいただき、全てリモートでの研修大会となりました。

公開保育ができないため、これまで指導助言者の先生から指導を受け進めてきた研究内容をまとめて研究発表し、発表園からの「問い」について参加者間で協議し、最後には指導助言者の先生ご指導をいただく形で行うことができました。リモートということで参加者の様子が見えない中で進行することになり、進行面で難しさがありました。今回の経験をこれからの研修のあり方の一方法として残しておきたいと思います。

最後になりますが、秋田県、秋田市、東北各県からご理解とご協力をいただきありがとうございました。初めてのリモート研修に、たくさんの先生方からご参加いただき、東北地区私立幼稚園教員研修大会を終えることができました。本当ありがとうございました。

表紙の絵は、情緒あふれる子ども達の情景など、センチメンタリズムを感じる作品として創り続けた木版画家の池田修三作品の「ゆこうよ」です。

私たちも、子ども達がかがやき、伸びやかに育っていくことを願い、これからも東北が一つになって研修研究を深めていきたいものです。





令和3年度 全日本私立幼稚園連合会  
第35回 東北地区私立幼稚園教員研修大会<秋田大会>  
大会事務局

〒010-0951 秋田県秋田市山王四丁目4-14

秋田県私立幼稚園・認定こども園連合会

TEL 018-863-1017 FAX 018-863-1160

e-mail akishiyouren@solid.ocn.ne.jp

